
仮面ライダー×リリカルなのは 転生者の名は仮面ライダー

マーボー豆腐星人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×リリカルなのは 転生者の名は仮面ライダー

【Nコード】

N2177S

【作者名】

マーボー豆腐星人

【あらすじ】

ちよつとだけオタクな少年、おのてらかずま小野寺一真が自らの命と引き換えに子供を庇って死んでしまった。

しかしそのことに興味を示した神様の力により転生した先はなんとリリカルなのはの世界だった。さらに彼には仮面ライダーへの変身能力も授かっていた…。

そんな彼がリリカルなのはの世界で歩き出す物語とは！？

第0話 プロローグ（前書き）

この作品は完全に作者の自己満足です。よって原作とは異なる展開になる可能性があります。それプラス文章表現諸々の下手、更新の遅さに定評のある作者ですがそれでも良いと仰ってくれる方々は見えていただきます。お願いします！

コメントは気軽にしてください。注意点などもドンドンお願いします！

第0話 プロローグ

俺は小野寺一真^{おのていさし}。ついさっきまでは何処にでも居るような普通の…
ちよつとオタクの高校生 だったんだ。俺が今居る所は日本、
いや今までの世界の何処でもない場所 ミッドチルダだ。本当な
らここは『魔法少女リリカルなのは』というアニメの世界の場所だ
った。

そこに俺がいるには理由があつた。

「まさか本当にこうなるなんてな…」

俺は呟き、つい先ほどの会話を思い出す

「あれ、ここは？」

俺は気付いたら辺り一面真っ白な所に居た。おかしい、確か俺は

「やっと目が覚めたようだね」

不意に後ろから聞こえた声に俺は振り返る。そこには白いローブの
ようなものを身に着けた少女が居た。

「君は…誰なんだ？」

第一声がそれだった。もう少しマシな言葉が出てくれば良かったのだが、俺にそのような事は期待しない方がいい。しかも今は内心結構焦ってるからな。少女はそんな俺を見てクスリと笑った。

「ああ、僕は翠^{すい}。それでも一応神の端くれさ。まあ落ち着きなよ」

俺とは反対に翠は冷静な態度で俺の質問に答えた。その態度のおかげか俺は少しづつ落ち着きを取り戻した。神？まあ何かの聞き間違いだろ。

「そ、そうなのか…で、俺がここに居るのは何故だ？」

「それには訳があつてね。僕も神の端くれと言っただろう？神にも種類があつてね、僕は生命を扱う神なんだ」

…これはどう反応したらいいの！？初対面の人に『私は神です』ってヤバくね！？ああ、そうか俺は夢を見てるんだ。そうだ、だから痛い子と遭遇してるのか。じゃあさっさと目を覚まそう　痛っ！コイツ、俺を「何バカなこと考えてるんだ」みたいな目で見ながら脛蹴りやがった！

蹴られた脛を押さえる俺をスルーして翠は再び話し出した。

「いつものように僕が下界を覗いてたらちょうど君が幼い少年を事故から庇うのを見てね。君は端から見ても重傷でそれはもう酷くて間も無く死んでしまったよ」

ああ、あれか。あの子助かったんだ、良かった…ってちょっと待てえ！

「俺死んでたのっ！？じゃあここに何処っ！？」

まさかの衝撃カミングアウト！？ちょっと待ってよ！俺帰って録画してた仮面　イダー見たいのに！何でっ！？Why!?

「今からそれを説明しようとしたんだが　」

「えっ！？ホントに死んでる！？だけど痛覚はあったし、けどさっきからなんかふわふわしてるし、あれ？でも　」

パニックになって自分でも何がなんだか分からないかった。そのとき俺の視界が真っ暗になった。な、何だ！？

「落ち着いて、ゆっくりでいいから。そうしたら僕の話聴いて欲しいんだ」

翠が俺の頭を優しく抱きしめていた。”大丈夫”と言い聞かせるように。情けないことに俺はそれに甘えてしまった。しばらくして俺の気分が落ち着いたら腕を離れた。

「……ゴメン。まさか自分が死んでたとは思わなくて」

翠に抱きしめられて、かなり恥ずかしかった。けどそれ以上に感謝していた。あのまま放置されたら俺はずっと喚いてただろうからな……。

そんな俺を見て再び翠が口を開く。

「フフッ、別にいいさ。じゃあ話をもどして…僕は君に興味が沸いたんだ。人間は結局、自己保身ばかり考える人が大半だと思ってた

からね：少なくとも僕が見てきた人間はそうだった、けれど君は違った。君は少年が危ないと分かると一目散に少年のところへ駆けていった。そして自らの命と引き換えに少年を救った：そのことに僕は興味が湧いたんだ。そしてこの空間に魂を呼び寄せたんだ」

俺は翠に興味を持たれたようだ。そして俺は今の話を聴いて本当に翠が神であろうと思った。

「：そうだったのか：けど俺も自己保身に奔るときもあるぞ」

一番大事なのは自分自身、そう思っている人は殆どであろう。俺も例外無くそうだ。ただあの時は体が動いていたんだ、俺が一瞬だけでも『助けたい』って思った時には。

「そうかもしれない。だが君が命を投げ出して他人を助けたことに変わりはないからね、僕にはそれで十分君という人間が分かったんだ。さて、じゃあここからが本題だ」

そう翠が言つと俺の目の前に白く輝く球体が現れた。なんだこれ？いきなり出てきたぞ。

俺はつい後ろへ一歩下がる。

「それは鍵さ。新しい世界への鍵。君が行きたい世界を思い浮かべるんだ」

「へ？新しい世界の鍵ってどういうことだよ？」

（いきなりそんなこと言われても俺には理解できないんだが…）

そう思っていると翠は「簡単にいうと…」と言って再び口を開いた。

「まあ転生のようなものだ。ただ君の容姿と記憶は生前のままだけだね」

転生！？じゃあ俺はまた生き返れるのか！

「ああ、元の世界はやめておきたまえ。君は死んだことになったるんだ。悪いけど事故そのものが無かったことには出来ないから既に死体は火葬されてるだろう」

「俺の体ーっ！？」

俺は叫びその場に蹲る。だって自分の体がもう燃やされましたと言われたのだから。けど他の世界で生き返れることに変わりはない。こうなったらもう前向きに考えよう！

（転生か…そうなると俺が望む世界は　　）

「リリカルなのはか仮面ライダー剣、どっちかなんだよなあ」

と呟く。

ヲタ脳全開。異論は認めん！俺が行ってみたいと思ったのはこの二つなの！

なのはの世界だったら魔法とか使えたらいいとか、なのはやフェイト達と仲良くなれたらなあとか思うし、剣の世界だったらライダーになりたいしダディに会ってみたいし。

すると翠はその呟きを聴き逃さなかったらしくそしてこう言ってきた。

「じゃあその両方を叶えてあげるよ」

「えっ？」

どういうことか聴こうと思ったときには目の前の球体が激しく輝き、俺は意識を失ってしまった。

つーことで俺は無事リリカルなのはの世界へと転生した。正直呆気無さ過ぎだった。そして俺の手元にはブレイバツクル、ギャレンバツクル、レンゲルバツクルの三つがあった。

「本物：だよな。マジで両方やってくれたのか……：翠、ありがとうな。俺に新しい生命をくれて。まあお前が興味を失わないような生き方するからよ」

まさか死んでいるとも、そして生き返れる（まあ転生だけど）とは思って無かった。一年前、両親と死別してからあまり人とも関わらなかつた俺には今までの世界への未練はあまり無い。強いて言うなら彼女ぐらい作リたかつた……これぐらいか。ま、それもこれから考えていけばいいか。

翠への感謝の気持ちと新しい生き方への期待を胸に俺は新しい世界を歩き出した。

僕は誰も居なくなった場所で再び下界を覗こうとしていた。
そのとき

「っ！？この感じは……彼が行った世界に不穏分子イレギュラーが紛れ込んだのか？」

すぐに確認すると確かに不穏分子イレギュラーが紛れ込んだようだ。だが僕の力では転生させることは出来てもその世界への干渉は不可能だった。
僕は唇をかみ締めた。これほどまでに自分の力不足を恨んだことは無い。

「……だが彼には戦う力がある……すまない小野寺君、君の力で解決してほしい」

翠は独り呟いた。

その不穏分子イレギュラーを――真はまだ知らない

第0話 プロローグ（後書き）

どうも、作者のマーボー豆腐星人です。久々の小説投稿で緊張がやバイですw

この作品は作者の自己満足の塊であり、さらに文章力皆無&更新の遅さに定評のある自分が書いております。故にいろいろ問題点や疑問点、原作との相違点があると思われます。そのときは遠慮なしにコメントしてください！反省点を活かしまともな作品にしていきたいと思っております。

こんな自分の作品ですが、どうぞ宜しく願います！

第一話 少女を救う仮面の騎士（前書き）

作者「懲りずに再び投稿しました！早速自己満足全開です」

一真「おいコラ早すぎだろ。文も下手だし。もっと上手に書けないのか？つまらんぞ」

作者「ぐっつ！気にしていることを…こうなったら」

一真「えっ？ちよっ、体が消えてく！」

作者「ヘッヘッへ、俺に逆らうところなる運命なのだ！」

一真「…お前主人公消してどうすんの！？」

作者「まあ見苦しい点が多いですがどうか見て行ってください」

一真「無視すなーっ！！」

第一話 少女を救う仮面の騎士

「さてと、ここは一体どこら辺なんだろうか？」

そう言つて辺りを見渡すもののここがどこなのかはよく分からなかった。ただ前方に空港らしきものがあつた　　が、そこは火の海になつていた。

「うおつ、火事だ！…行つてみるか。もしかしたらこの場所がどこら辺か分かるかもしれないし」

そう言つて俺はこれまたすぐ傍に置いてあつたバイク　ブルースペイダーに跨る。単車の免許は持つてないが…親父がよく乗り方教えてくれてたから運転はできる（よい子はちゃんと免許取るう）。俺は燃えている空港らしき施設へ向けてバイクを走らせた。

「これは凄いことになつてるな」

空港らしき場所に着いた俺は開口一番そう呟いた。だつてあれだよ、火の大きさが半端ない。ガスタンクが爆発しないと　いや、それよりも上か？こんなことにはならないぞ。

そう考えていた俺の耳に救助隊員達の声が聞こえた。

「おい！中にまだ要救助者がいるんだ！早くしろ！」

「分かつてる！だが火が強すぎて突入できない！」

（まだ中に人が！？）

そう思った俺はすぐさま飛び出そうとした　　が、俺一人ではどうしようもなかった。

そのとき俺はふと思い出した。アレが本当に使えるのならもしかしたら、と。

そう思い俺はバイクから翠^{すい}からもらった物の一つ、ブレイバツクルを取り出して腰に装着した。

「頼む、上手くいってくれ…変身！！」

『Turn Up』

俺はバツクルの《ターンアップハンドル》を引いた。するとバツクルの《ラウズリーダー》が回転し青色の光のゲート『オリハルコンエレメント』が発生し俺を通過した。

「上手く…いったか！」

そこには仮面ライダーブレイドへと変身した俺が立っていた。

「よしっ、コイツなら火の中でも大丈夫だろ。さて、行くぜ！」

そう言って俺はバイクに跨り『マツハジャガー』をスキャンし、マツハスペイダーを発動させ炎の中に飛び込んでいった。

（くそっ！想像してたよりも中は酷いことになってるな。天井が落

ちてきそうだ、これは長くもちそうにないな)

俺は空港の中をバイクを加速させた。

そして先へ進むと要救助者を見つけた。しかし要救助者達は俺を見て驚いていた。まあ当然だろうなあ。

その要救助者達の周りにはバリアが張ってあった。

(一体誰が…と、それよりも助けなくちゃ!)

「大丈夫か!? 待つてろ、すぐこの火をなんとかするから!」

が、俺は言ってから気付いた。

(あれ、なんのカード使えばいいんだ?…しまった、ここはレンゲルになるべきだった!)

俺が一人で混乱していると要救助者の一人が口を開いた。

「あ、あの。魔導師の女の子がバリアを張ってくれて。それから妹を探しに行くってあつちに」

その指は俺の背後に広がる壁のような炎に向けられていた。なんて無謀な　って、俺も同じぐらい無謀だったな。

「分かった、俺が探して　って、その前にここを何とかしないとーっ!」

俺は叫んだ。そこへ一人の魔導師が文字通り飛んできた。

「時空管理局です。もう大丈夫ですよ　ところであなたは?」

魔導師が俺を見ながら尋ねた。

あれ…この人つてもしかしてフェイト・テストロッサ…だよな。俺の知ってる姿と比べてかなり大人びてるけど雰囲気とか髪型とか声で分かる。

と、それよりも質問に答えないと…ふむ、じゃあここはあの一言を。

「通りすがりの仮面ライダーだ」

フェイトは頭の上に『？』を浮かべていた。ですよねー。実際に言う結構恥ずかしいな…。

「ま、まあそんなのはどうでもいい、それよりもあつちにまだ妹さんを探しに行った魔導師が一人居るんだ。俺が探しに行くからこの人たちを頼めるか？」

本音は俺じゃこの人数を運んだり出来ないからなんだけど。

「…分かりました。お願いします」

フェイトは真面目な顔で答えた。その顔には俺に任せても良いのか？ という疑問が浮かんでいたが。

「任せろ。絶対に助け出してみせる」

そう言っただけ俺は奥へバイクを走らせた。

「…仮面ライダー、か」

フェイトは救助者を運びつつそう呟いた。

「どこだ、何処にいらっしゃるんだ魔導師の女の子」

この空港はかなり広がった。そのせいでなかなか魔導師の女の子が見つからない。
ここにはいないのか、と思ったとき。

「きゃあっ！」

爆発音とともに微かに悲鳴が聞こえた。

「女の声…まさか！」

俺は声の聞こえた方へと向かった。

「見つけた！」

少女は螺旋状の通路にいた。

（マズイ！早くしないとここも危ない！）

「君！そこを動かないで！今助けに行くから！」

少女は俺の声に反応しこちらの向いた。

（よし、そのまま何事も起こるなよ…）

しかし、俺の願いは虚しく通路は崩れ始めた。

「きゃああああっ！」

「なっ！くそっ！」

少女の悲鳴が聞こえる中、俺はバイクから下りて少女の方に飛び出した。そして腕に装備されていた『ラウズアブソウバー』にQのカードを挿入しJのカードをスラッシュした。

すると俺　ブレイドの鎧は金色に変化し背中に翼が装着され『仮面ライダーブレイド ジャックフォーム』に強化変身した。

「うおおおおお、間に合えーっ！」

俺は少女に向け、飛んだ。

「ハアハア…だ、大丈夫か？」

「え、ええ。あ、ありがとうございます…」

俺は少女を抱きかかえて空中を飛んでいた。危ねえーっ！咄嗟にジャックフォームにならなかったら今頃どうなってたか。まあ、女の子も無事に助かったから良かった良かった。

「ゴメンな、来るのが遅くなって。もう大丈夫だ」

少女は怯えてるのか戸惑っているのか何も言わなかった。まあ仕方ないよな。

「二人とも大丈夫？」

そこへフェイトがやって来た。つーか早いな、おい。もしかしてこの子も一人で助けられたんじゃないのか？

「ああ、なんとかな……ここもそろそろヤバイ、さっさと脱出しようぜ」

「分かりました。じゃあ君、私が運んであげるからおいで」

そう言っただけで女性少女を抱きかかえる。じゃ、さっさと行きますか。俺とフェイトは出口へ向けて飛んで行った。

飛んでいるとフェイトが抱きかかえている少女に話しかけてた。

「妹さんの名前は？どっちへ行っただかとか分かる？」

「あの、エントランスホールの方で逸れてしまつて。名前はスバル・ナカジマ、１１歳です」

そう言つたところでどこからか俺達とは別の声が聞こえてきた。

『こちら通信本部。スバル・ナカジマ、１１歳の女の子、既に保護されています』

どうやら通信らしい。その内容を聞いた少女の顔から不安の色が消えた。

『救出者は高町教導官です怪我もありません』

少女の前に画像が現れた。その画像は白い魔導師　―高町なのはが救出した少女を救急隊に引き渡している画像だった。

「スバル…良かった」

妹の無事が分かり、少女は涙を流した。その顔は笑顔だった。フェイトは本部へ通信を返しているのでそのタイミングを見計らつて俺は少女に声を掛けた。

「良かったな、妹さんが無事で」

「はい、本当に良かった……先ほどは助けて頂いてありがとうございます」

「え、ああ。当然のことだから気にすんな。ところで君は俺の姿を見て驚かないのか」

普通は何かリアクションあると思うんだけどなあ。さっきから何も言われないんだが。

「助けていただいた方なのに驚いたりはしません。かつこいいとは思いますが」

カツコイイ！？おお！仮面ライダーはやっぱりカツコイイんだ！くっつ、仮面ライダーになれて最高だぜ！

「君、お名前は？」

そこにフェイトの声が聞こえた。そっぴやこの娘の名前聞いてないや。

「ギンガ、ギンガ・ナカジマ陸士候補生、13歳です」

ふん、ギンガ・ナカジマって言うのか。覚えておくか。

「候補生か。未来の同僚だ」

「き、恐縮です…」

「えっと、じゃあ貴方は？さっき『仮面ライダー』って言ったけどフェイトが俺に尋ねてくる。流石にさっきの説明じゃなあ。」

「俺は小野寺一真、民間人だ。勝手に救助活動しちゃって悪かったか？」

「そんなことはありません、逆に助かりました。ところでその姿は？」
やっぱり訊くよね普通。

「まあ色々と面倒くさい事情があつて…バリアジャケットと思つてくれ」

そう答えて俺達は出口に向かって飛んで行く途中に思い出した。

「バイク忘れた…！」

俺はフェイトに「忘れ物した、先に行つて」と一方的に言つてジャガーマツハを発動して超高速で中へ戻つて行つた。

「…小野寺一真さん、か」

ギンガはポツリと呟いた。

第一話 少女を救う仮面の騎士（後書き）

最初に言っておく！（後書きなのに）俺はかーなりヘボイ！
今回から本編に入りました。時期はStrikersのプロローグ
の辺りです。

結構無理やりな展開が多いと思われるのでアドバイスや感想をお待
ちしてます。どんどん下さい、遠慮はいりません！
更新速度は相変わらず遅いです。

オリキャラ設定

8月16日更新(前書き)

作者「いやゝ最近ギャルゲーにハマって攻略に大忙しだよ」

一真「おいおい、ダメな人間がもっとダメになるぞ」

作者「ああ？」

一真「つたく、ただでさえ酷い作品がもっと酷くなるぞ」

作者「…お前、もう一回殺すよ」

一真「ゴメンなさー！ーい！ー！」

オリキャラ設定

8月16日更新

オリキャラ設定

おのでらかずま
小野寺一真 15歳（本編開始時） 男性

立ち位置

この作品の主人公。

詳細

元々現実世界に居たのだが子供を事故から庇い死んでしまう。だがその行動に興味を持った神である翠^{すい}により魔法少女リリカルなのはの世界に転生する。

大の仮面ライダー好きであり転生した際に仮面ライダーブレイド、ギャレン、レンゲルへの変身アイテムと変身能力を得るが、専ら変身はブレイドである。リリカルなのはも好きだが2期までしか見たことが無い。

転生前は中学までは剣道をやっていて部内でもそこそこ上手かったが高校に入学してからはバイトをするため剣を置き、帰宅部だった。その理由は高校入学直前に両親が不慮の事故で死亡してしまい、生活費を稼ぐために日々バイトをしていたからである。そのせいか家族や仲間というものに対して強いこだわりを持つ。

性格

考えるよりも行動する性格でお人好し。さらに単純な思考をしているが、いざという時には咄嗟の判断が出来る。ギンガとの交流で『一手先』を考えるように心がけている。が、相変わらず突っ走ることが多い。

外見

黒髪のスツツン頭（某不幸な少年とは違う）。背丈は170ぐらい。

顔はイケメンではないが割と整っている。

アッシュ・レーゲン 15歳 男性

立ち位置

親友、悪友

詳細

入学してきた一真と寮が同室の少年。

騒ぐのが好きでいつも派手なことを実行しようと考えてる。

使用デバイスは一般的な練習用ストレージデバイス（色は変えている）。

外見

金髪で肩まで架かる長さ。

背は一真と同じぐらいかそれよりちょっと上。

眼つきが少し鋭い。結構イケメン。

性格

お調子者で騒いだりするのが好きだが本質的な部分は割りと言面目だったりする。

好きなことに対してはかなりの集中力を発揮できる。

リイナ・ウェーバー 12歳 女性

立ち位置

ヒロインその2

詳細

ギンガの友人。人見知りで初対面の人とは一人ではなかなかコミュニケーションが取れない、だが気を許した相手なら流暢に喋れる。使用デバイスは盾型の『アルテミス』

外見

黒髪のロング。スレンダーなスタイル。

どこことなく和風な感じがする

性格

少々ドジなところもあるが性格は心優しく、周りのことを優先して考えている。

これからも追記していく可能性大。

オリキャラ設定 8月16日更新（後書き）

今回はオリキャラ設定です。

と言うのも、前書きで触れているようにギャルゲーにかーなりハ
マリまして文章がまだ出来上がってないためです。

来週にはちゃんと出来ているようにしますので今回は大目に見て下
さい。

ちなみに更新ペースは一週間です。感想、コメント遠慮無く。

第二話 陸佐と対面（前書き）

作者「今回はリアルに文章が酷いです。自分でも驚くぐらいです。私が三流なので多めに見てください。お願いします」

一真「おいおいしっかりしろよ。三流なりのプライド見せろよ」

作者「分かった…次はしっかりと内容整理してからにするよ」

一真「あれっ、随分張り合いが無いな　　っておい！何処行くんだよ！？おい！」

第二話 陸佐と対面

あの後俺はブルースペイダーを回収し、中から脱出した。幸いブルースペイダーに目立った損傷は無かったためにすぐに動いた。そして俺が外に出てきたとき（変身したまま）

「その君！」

呼ばれて振り向くとそこにフェイトが居た。どうやら救助は終了したようだったようで俺の方へ歩いてきた。

「あ、さっきの…ええと」

「私はフェイト・T・ハラOWN執務官です。君は確か…小野寺一真君だよな？」

「はい。先ほどはありがとうございました」

そう言つて俺は軽く頭を下げる。名前は元々知っていたが初対面の人に名前を知られていたら変なのであえて知らない振りをした。

「感謝するのはこちらです。先ほどの救助支援、感謝します。それと君にお礼を言いたい人が居るんだけどいいかな？」

俺にお礼？さっきの娘かな？折角だから会ってみるか。

「大丈夫ですよ、フェイト・T・ハラOWN執務官」

「そっか。じゃあ付いて来て」

俺がわざとらしく言うつとフェイトは軽く微笑んで案内してくれた。

（いやゝやっぱりフェイトは優しい人だなあ）

しみじみ思う俺であつた。

俺がフェイトに連れてこられた所には指揮車があり、そこに一人の男性が立っていた。

「あの方だよ。じゃあ私はいろいろと報告とか残ってるから」

「そうなんですか。いろいろありがとうございました」

俺はフェイトと別れて男性の元へと歩いていった。

「わざわざ悪いな。俺は時空管理局陸上警備隊第108部隊長ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐だ、よろしく」

「あ、俺は小野寺一真です…ってあれ、ナカジマって確か…」

「ああ、お前さんが助けた子供は俺の娘だ。ま、お前さんも十分子供だな」

そう言つて彼は苦笑した。俺はというとまさか助けた子の親が目の前にいるという状況に焦っていた。

（な、何だ？この独特の居心地の悪さは。高校とかバイトの面接の時の感じとは違うぞ！？）

なぜ例えがそんなものなのかというと、俺が短い人生を経験した中でこの二つがかなり緊張していたからである。

「まあそれは少し措いとしてだ：お前さん、民間人だろう。なぜ民間人があのような装備を持っていたんだ？」

痛い所を突っこまれた。俺は元々この世界の住人では無い。無理に辻褄を合わせようとしてもすぐにボロが出てしまうだろう。

（下手な答え方をすると後々面倒なことになるな…）

「えっと、実は俺」

そう思った俺は正直に話すことにした（ここがアニメの世界であるということは伏せておいたが）。もしかしたらそっちの方が面倒くさいことになったのかもしれない。が、俺はそんなことは一切考えていなかった。

「なるほどなあ：まあ信じがたいことではあるが、信じられないことでは無いな」

あれっ、意外と分かってくれた！？絶対真っ向から否定されると思ってたのに。

「あれ、否定とかしないんですか？正直自分でも分かってくれ
思ってたなかったんだけど」

俺がそう言つとゲンヤ陸佐は苦笑しながら

「俺の知り合いにそういった方面の奴がいてな。随分慣れちまっ
ぜ」

と答えた。そして俺の頭の中に一人の少女の姿が浮かん

（もしかして…はやてのことかな？）

「そうなんですか。ところで…」

「ん？ああ、ギンガのことか。あいつなら一応念のために病院だ。
まあ怪我も無いし明日には退院できるはずだ」

「無事なんですね？あゝ良かった」

そついや妹さんも救助されてたな。姉妹そろって無事で良かったよ。

「その件については本当に感謝している。俺にはもうあの二人しか
残ってないからな…」

「えっ？」

もうあの二人しか残ってないって、どういうことだよ？

「っと、スマン。忘れてくれ。そついやもう一人お前さんに会いた

「い奴がいるんだ。会ってくれないか？」

「…今は追及しない方がいい気がするな。それよりもまた俺に会いたい人がいるのか…」

「分かりました。で、どこに居るんですか？」

「あんたの後ろや」

その声は俺の真後ろから聞こえた。振り返るとそこには俺の知っている人物

「初めまして、やな」

八神はやてが居たのであった。

第二話 陸佐と対面（後書き）

今回は私情（合ってる？）のせいもあり内容、文章共に酷いです。
後日ゆっくりと考えて修正したいと思っています。

もう少ししたらなのはとも出てくると思いますので今しばらくお待ち下さい。

アドバイス、指摘などのコメント受付中です。

第三話 はやてとカリム（前書き）

だんだんと内容が酷くなってきました…。
それでも頑張ってるつもりです（泣）

第三話 はやてとカリム

あの後俺ははやてによってなのは、フェイトに会った。あんまり時間がとれなかったが楽しく会話ができた。二人とも大人っぽくなつてて少し照れた。

次の日、俺ははやてに連れられて聖王教会本部にやってきた。どうやらそこのお偉いさんから会ってほしいとのことらしい。

（ここは管理局と同じく、危険なロストログアの調査と保守を使命としている宗教団体…ってはやてに聞いたけど、一体何が違うんだ？）

そんな事を考えつつ俺ははやての後を着いて行つた。

「初めまして、私は聖王教会教会騎士団騎士、カリム・グラシアです」

部屋に通された俺とはやては聖王教会のトップである騎士カリムと面会した。しかもこの女性ははやての直属の上司らしい。

「俺は小野寺一真です。ところで…どうしてここに呼ばれたのですようか」

はやてが言っていたがなのはやフェイトはまだ彼女と会ったことが無いとのこと。いいのか、俺が会っても？

「それは今から説明します」

そう言つて彼女は椅子から立ち上がりカードとも札とも言える紙を空中に展開させた。おお、凄え。流石リリカルなのはの世界、何があつても不思議じゃない。

「これは私の稀少技能^{レアスキル}、預言者の著書^{プロフィール・シュリフテン}です。最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成を行う能力です。ですが、預言の中身は古代ベルカ語で、しかも解釈によつて意味が変わることもある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度ですが」

そう言つて彼女は苦笑する。俺としてはそんな能力あつたら嬉しいがな。東海大地震とか予言できるし。

「けど、大規模災害や大きな事件に關して的中率は高く、管理局や教会からの信頼度は高いねんけどな」

と、はやては言つた。するとカリムは少し照れた表情をしながらもそこから一枚の紙を取つた。

「これにはこう記されています。”異なりの空から黒き意思現る。世が黒に染められる時、仮面の騎士が光をもたらす”と」

仮面の騎士…まさか！

「まあ分かつとるやろうけど、それはアンタのことや」

俺は一応自分がどうしてここに居るかを二人に話した（やっぱりここがアニメだということは伏せて）。そして”仮面ライダー”の事も。そうしたらカリムが「でしたら私が何とかしましょう」と言っ
て部屋を出て行った。

（思ってたよりも話しやすそうな人だな。これなら多分なのは達もすぐに仲良くなれるだろ）

どーでもいい事を考えていた俺にはやてが話しかけてきた。

「なあ、アンタが元いた世界ってどんなところなん？」

元いた世界か…普通だな、普通。少なくとも俺の見てきた限りでは普通だ。と答えたら少し不満そうだった。「そんなんちゃうくてやな。」「言ったところでカリムが戻ってきた。

「貴方の戸籍を作りました。とりあえず身柄は聖王教会が保護する、という事になりました」

「あ、ありがとうございます！」

おおっ！まさかこんな簡単に事が進むとは思ってなかったぜ。

「で、これからどうするつもりなんや？」

はやてが訊いてくる。そんなの決まってるさ。

「無理かもしれないけど…管理局に入りたい」

「ふふっ、あんたならそう言うと思つとたわ。じゃあ先ずは”魔力資質”があるか確認せえせんとな」

カリムも「そうしたほうがいいわね」と言つて賛成した。あれ、俺魔力とかそーゆーの無いと思うんだけど…無かったら入れないのかな？ヤベツ！どーしょ！？

少し不安になっている俺ははやくに引きずられるように部屋を出た。あれ俺どこ連れてかれるの！？つかはやくさん足完治したんですね！。

「うえー、ようやく終わったか…精密検査なんか受けたの初めてだ」

検査からようやく開放されて病院から出た俺は深呼吸する。やつぱり外の空気の方がいいな。

どうやら俺は信じられないことに魔力資質があつたようだ。多分翠^{すい}が何かしてくれたんだろうと俺は思う。流石になのはやフェイト程の魔力は無かつたが一般的な魔導師と比べたら結構多いらしい。

それで俺は第四陸士訓練校って所に入学することになった。これもはやてが手を回してくれたらしい。ああ、まだこの世界に来て二日目なのにもう頭が上がらないぜ…。

第三話 はやてとカリム（後書き）

ようやく次ぐくらいから戦闘描写とか書けそうです。
指摘などの意見待ってます（改善点とか教えて欲しい）

第四話 変身！仮面ライダーギヤレン（前書き）

あと一週間で中間テストだあ。嫌だー！

第四話 変身！仮面ライダーギヤレン

はやてが「ちよつと用事あるから適当に観光しといて」と言つてどこかへ行つてしまつたため俺は言われたとおり適当にふらつくことにした。早く道や町などを覚えなないといろいろ不便だろうと思つたからだ。

しばらく歩いていると俺を知っている人物と遭遇した。

「あなたは…あの時の」

「あ…ギンガさん」

その人物とは昨日俺が空港から助けた少女、ギンガ・ナカジマだつた。せつかく会つたのだから少しぐらい話してしたいと思つたため「少し話したいんだけど大丈夫かな？」と訊くと向こうも俺と話したかつたらしく近くのベンチへ移動して話すことにした。

「あの、昨日は本当にありがとうございました！あのままだったら今頃私はスバルとも会えなくなつてしまうので…」

先に口を開いたのはギンガだつた。まあ俺は向こうが言うだろうことは大体予想できたので　というよりこれしかないだろ、俺でも分かるわ。

スバル…ああ、妹さんか。そーいや無事つて知つて泣きそうになつてたな。多分スゲー仲良いんだろ？俺には兄弟居ないからよく分かんけど姉妹つてこつゆうものなのかもな。

「そのことならもういいよ。それより怪我とかなかった？」

「はい、大丈夫でした。心配してくれてありがとうございます！」

(うつ…)

俺はつい顔を逸らす。なぜなら…今のギンガの笑顔が可愛かったからだ。正直、こつこつに慣れてない。女子とかとあんまり話さなかったから耐性とか無いからなあ。

俺が話を逸らすために思考を巡らせていると少し遠くから「ギン姉ーっ」と呼ぶ声が聞こえた。その声を聞いたギンガが顔を向けた方へ俺も向くとギンガに似た活発そうな女の子が駆けて来た。その後ろにはなんとゲンヤ陸佐もいた

「スバル！お父さんも」

なるほどな、この子がスバルか。良く似てるな。

スバルがギンガに飛びつき遅れてゲンヤ陸佐がやってきた。

「おお、お前さんも一緒だったのか。どうした、こんなところに用でもあったのか？」

「まあ、俺の魔力適正の検査とか訓練校の入学とかの手続きらしいです。俺もよく分からない間にはやてに連れてこられたもんで」

そう言っただけ俺は苦笑いをする。ゲンヤ陸佐は「アイツも強引なところあるからな」と言っただけ同情する目で見てきた。陸佐も苦労したんですね…。

「そつえば魔導師じゃなかったんですね。訓練校に入るんですか？」

「そうらしいな」

ギンガが訊いててくるのでそれに答える。俺としては普通に答えるだけのつもりだったのだが

「どこの学校に入学するんですか？陸士校ですか？空士校ですか？それとも」

「ちょ、ちょっと待って！早い、早すぎるよギンガさん！」

おい、何だこのマシンガントーク！思わずカイさん（ガンダム）になっちまったじゃねえか！

俺はギンガに「一つ一つゆくりと頼む」と言って会話を再開させた。何か最近女性に押され気味なんですけど……どうした？笑いたければ笑えよ……笑うなあ！（矢車風）

あの後用事が残っていたらしく三人と別れたのだが、なんとギンガが連絡先を覚えてくれた。女子のメアドとかを今まで貰ったこと無かったのでスゲー嬉しかった。ヒヤッホーイ！

スバルって子も元気そうな子だった。俺よりも二つ年下らしい。もしかしたら俺の後輩になったりしてな。

「そんなことがあったんか。なんや〜この世界に来て二日目です速ナンパか？」

「何で！？今の何処にそんな要素があった！？」

俺が先ほどの出来事をはやてに話したら……こうだよ。何でそうなる

のかまったく分らない。

俺ははやてから顔を背けつつ歩いてた。そーいや、なんか都心みたいな感じだな、ここ。車とか結構多いしな。

「きゃあ！エ、エリちゃん！」

聞こえた声のした方に振り向くと二人組みの男が幼い女の子を担いで車に乗り込んでいた。女の子の親と思わしき女性が走り寄るが車は発車してしまった。

「誘拐！？そんなことがこの世界でもあるのかよ！意外だな」

「そんなんゆうてる場合ちゃうやろ！こちら八神はやて一等陸尉です、至急応援を……はい、よろしくお願いします」

本音が出てしまった俺に釘を刺しつつ応援の要請をしたはやては騎士甲冑を装着し「ここで待ったとき」と言って車を追いかけて行った。

（そうはいかないぜ……俺は仮面ライダーだ、ちょちよつと片付けてやるぜ！）

そう思った俺は幸運にも近くの駐輪場に停めてあったブルースペイダーを見つけ出し、すぐにはやてを追いかけた。

しばらく走るとテレビのレポーターがカメラに向けて報道していたので近寄って話を盗み聞きしてみた。すると誘拐犯がとある店に立て籠もっているらしい。もちろん女の子は人質だ。そのせいかなかなか手が出せない状態らしい。

（そーいやはやての魔法って広い範囲に影響するやつ多いからなあ）

はやての魔法は大きい（派手な）やつが多いから人質に当たるかもしれない。

「ちょっと面倒かもな…あつ、何しとんねん！待ったきって言ったやろ！」

はやてに見付かった！どうする？

・逃げる

・言い訳する

・ゴメンなさい

・もう一回転生できるかな？

ダメだ。選択肢が死んでる。

「今結構マズイことになってんねん。危なくなるかもしれんから早く離れるんや！」

結構マズイか。はやてですらそう思うとは本当にマズイかもしれないな
俺はそう思いはやてに聞き返す。

「何がマズイんだ？はやての腕前なら大丈夫じゃないのか？」

「普通やったらそうなんや…けど、今回ののは普通じゃないんや」

普通じゃない？どういうことだ。

俺は犯人が立て籠もってる建物の中を覗くとそこには俺の知っている者達がいた。

「シヨツカー戦闘員！？なんでこの世界に！？」

黒ずくめの全身タイツと覆面、骸骨のような模様。間違いない、奴等はシヨツカー戦闘員だ。

「知ってるんか？どうやらあの建物の中に予め居たらしくて数は最低十人や。しかも建物全体に強力なAMFを張っている…つまり魔法が使えないんや、並の魔導師じゃ。あたしは使えるねんけど…範囲の設定とかが一人じゃやり辛いねん。人質に当たってまうかもしれん」

悔しさと焦りが入り混じった顔ではやてが言う。

（アイツ達…人質とって拳句に籠城かよ。しかも俺の恩人（いろいろと世話してくれたから）に迷惑かけるとは…許さん！俺が許さん！断じて許さん！）

俺は着ていた学ラン（転生前に着ていた服）の懷からギャレンバツクルを取り出し腰に装着した。それを見てはやてが驚いた顔をした。

「何してるんや！並みの魔導師じゃここで魔法は使われへん。アンタじゃ無理や」

そう言うはやてに俺は告げる。

「魔法が使えないとしても…仮面ライダーなら何とかできる！」

そう言つて俺はバツクルのレバーを引く。発生した『スピリチアエ
レメント』を通過し俺は『仮面ライダーギヤレン』へと変身する。
その姿を見て軽く驚くはやて。まあ皆最初はそうだろうな。

（女の子は縄で縛られて奥の方に居るな。だったらまずは人命救助
が最優先！）

「はやて、俺が出て来たら中に向けてでっかいの一発頼む」

そう言つて俺は建物の中へ入っていく。「えっ、どうゆう事や!？」
というはやての声が聞こえたがまあ心配ないだろ…多分。

俺は建物の中へ入った。案の定、奴等のお出迎えだ。

「イーッ、イーッ」

「悪いな、今はお前等と遊んでられないんだよ！」

俺は迫ってくる戦闘員を無視して奥の人質へ向け走り出す。

「クソッ、邪魔だ！」

「「イーッ!」「」

道を塞ぐように群がる戦闘員を某アメフト漫画の如く必死で突破し

人質まで辿り着く。

「大丈夫か？待ってな、今助けてやるから…なっと！」

俺は背後に迫ってきた戦闘員の腹にカウンターの右ストレートを打ち込む。決めてる最中に邪魔すんなっての。そして殴られた戦闘員は溶けて消えた。うおっ、怖っ！

俺はギャレンラウザーに「ジェミニゼブラ」のカードを切る。すると俺の隣に俺の　つまりギャレンの分身が現れた。現れた分身は群がる戦闘員に突っこんでいった。

「^{デコイ}囷役頼むぜ俺の分身！」

俺は女の子を抱えて建物から逃げ出した。

外に出るとはやてが騎士甲冑を身に纏い中の様子を伺っていたところだった。

「はやて、一発よろしく！」

「分かった！『^も刃以て、血に染めよ。穿て、^{うが}ブラッディダガー！』」

はやてが魔法を詠唱するとはやての周りに大量の短剣が現れた。それを中にいる戦闘員に高速で打ち出した。

放たれた短剣は見事に全弾命中し戦闘員と俺の分身は消えてなくなった。

「よっしゃ！流石はやてだぜ！」

俺は変身を解除し、はやてに近寄る。はやても騎士甲冑を解いていた。

だがはやては難しい顔で戦闘員がいた建物の中を見ていた。

「どうかしたのか？もうアイツ達はいないぜ」

「分かってる…けど何でアレは消えたんか良う分からんくてな。ア
ンタ知ってるか？名前呼んでたやん」

いやまあ知ってるんですけどね。けど強化された人間なんて言うても信じてもらえないかな、流石にこれは。

「まあ…アイツ達はショッカー戦闘員、ショッカーっていう組織の
下っ端要員だ。けど…なんでこの世界にショッカー戦闘員がいるん
だ？」

それが謎だ。この世界にショッカー、ましてや仮面ライダーが無か
ったんだ。

何かがおかしいな、これは。

俺はこの時まだ分かっていなかった。俺が転生してきたことでこの
世界が奴等によって恐怖に陥れられるなんて。

第四話 変身！仮面ライダーギャレン（後書き）

いろいろ酷い内容です。だが私は謝らない。

第五話 入学と親友と野望（前書き）

テスト追試だー！ー！！畜生！！

今回は短めです。次回はなるべく長めにします。

第五話 入学と親友と野望

次の日、俺ははやての紹介でマリエル・アテンザ、愛称は「マリー」さんという人物に会った。どうやら彼女がレイジング・ハートやバルディシュにカートリッジシステムを組み込んだ人らしく、さらにはやてのシュベルクロイツを製作したのも彼女らしい。

そんな彼女によって俺のバツクルが解析された。まあ結局のところ、ブラックボックスが多すぎてあんまり分析とか出来なかったらしいがマリーさんはなんとバツクルにデバイスとしての機能を付ける、といった魔改造をしてくれた。正直この世界でデバイスがないといういるとキツイのでありがたかった。

（この世界に来てから女性に頭が上がりなくなっただな…）

嬉しい反面、こう思えてしまう俺であった。

その次の日に俺は第四陸士訓練校に入学した。細かい手続き等は事前に終わっていたので校長先生と少し話して俺はこれから生活する寮へと向かい荷物を置いてきた。そしてそのまま教室へ直行した。俺は本来の入学時期とは違うタイミングで入ったため一種の転校生的な感じになっていたようでクラスで軽い自己紹介が終わるとクラスメイトに囲まれて質問攻めにされた。

「なあ、今までどんな所に居たんだよ？ミッドか？それとも他の世界とかか？」

そのクラスメートの中でも一番馴れ馴れしく接してきたのがこの男、アッシュ・レーゲンである。

「俺はアツシュってんだ。以後お見知りおきってね」

そのとき俺はふと思い出したことがあった。アツシュという名はどこかで見たような気がするのだが、と。

「アツシュ？あれ、なんか知ってるような気が…」

そう言い少し悩む俺にアツシュは人懐こそうな笑顔をみせながらこう言った。

「そう、お前がこれから住む寮のルームメイト、それが俺だ」

「いやゝルームメイトが転入生とはなあ。これから面白くなりそうだぜ」

寮部屋に入るや否や、アツシュはそう言って備え付けのベッドに勢い良く寝転がる。それを見ながら俺もベッドへ腰掛ける。

「俺もだ。いろいろまだ分からないことが多いからな。頼りにしてるぜ？」

そう言って笑いあふ。俺とアツシュは出会って早々意気投合し既に親友マシダチと言えるくらいの仲になった

「早速明日から訓練だ。一真、お前は確かデバイスを持ってるって言ってたよな。ちよつと見せてくれよ」

「ん？いいぜ…よつと、こんなんだ」

俺はマリーさんに改造してもらったバックルを見せる。するとアッシュは驚いた顔をして目を輝かせた。

「何だこれえ！？今まで見たことねえぞこんなの！凄え、何処で手に入れたんだ！」

アッシュは本当に驚いているようでしきりに「凄え！」と叫んでいた。

（神様に貰いました！…とは言えんわなww）

「貰い物だ。俺もそこんとこ詳しく分からん。ま、使えるから問題ないだろ」

そう言いバックルを返してもらうとそれらを小さくし懐に入れた。バックル三つはデバイスとしての機能を付ける際に、携行性の向上のため小型化できるようにも改良されていた。マリーさん凄え。

「そうかよ、まあそこ等辺はどうでもいい。ただ明日からの訓練でヘマするなよ。連帯責任でルームメイトの俺までペナルティあるんだからな」

どうやらこの学校の訓練は最近から”連帯責任制”というものがあ
るらしくその名の通りルームメイトがミスをした場合に相方までペ
ナルティを負う、というものだ。

「分かってる。それにそれはこっちの台詞だ」

「ヘッ、そこなくっちゃ。よし、明日も早いから今日はもう寝るか！」

そう言っアッシユは言っアッシユとすぐに寝てしまった。

「早すぎだろ…けど明日から頑張らなきゃな！よし、俺も寝るぜ！オヤスミ！」

その日はグッスリと寝て、結果二人共寝坊しました。

何処か分からない場所。その暗い空間で二人の男が話し合っていた。

「…では、我々に協力すると？」

「そうさせてもらおう…我々の目的の為に」

そう言っアッシユは言っアッシユとすぐに寝てしまった。そこには覆面黒タイツの戦闘員とそれよりも上位存在せある兵士 改造人間が並んでいた。

「なるほど…人間を素体としていながら良い出来ではないか。では頑張ってくれたまえ…我々と」

「我が偉大なるショッカーのために…」

この出来事をまだ誰も知らない

第五話 入学と親友と野望（後書き）

後日、内容に加筆していと思いますので今回は多めに見てください。

第六話 クロスレンジの極意（前書き）

遅くなってすみません！最近学校が忙しくて…これから復活していきたいです けど来週模試だ！

第六話 クロスレンジの極意

ここは第四陸士訓練校。その訓練場の中央に二つの人物が戦っていた。仮面ライダーブレイドこと俺とクロスレンジ戦の教官であるダン・レントラーである。

「おりゃあ！」

「フンツ！まだまだ甘いぞ小野寺！」

ダンはブレイラウザーで斬りかかった手を掴んで一本背負いで投げ飛ばす。

「ガアア！クソツ、まだまだあ！」

投げ飛ばされた俺は再び突進していくが今度は巴投げで投げ飛ばされる。

その後も次々と向かっていくもまるで赤子の手を捻るかのように俺は投げ飛ばされた。

「だらしなぞ小野寺！足腰がなつとらん！訓練場二十週、行けえ！」

「グツ…ウエーイ…！」

俺は半ばヤケクソ気味に叫び走っていった。その叫びは訓練場を走らされることに対する怒りではなく、ダンに手も足も出なかった自分自身への怒りであった。

「アイツも何考えてんだか。あのゴリラ教官様は赴任してから4年間負けなしだったのに。つか化けモンかよ」

そう言ったのは一真のルームメイトであるアッシュであった。彼は手にしたタオルで汗を拭きながら視線を一真から外し近くにいる他の訓練生に同意を促そうとするが

「ほう、じゃあその化け物退治はお前にやってもらおうか」

アッシュは背後からの声を聞き顔を真っ青にし振り返った。するとそこにはゴリラ教官様ことダンが仁王立ちで立っていた。

「いや、さっきのは疲れからつい思ってもいない事を言ってしまっただけで決して本心から言った訳では無くてですね」

「そんなに口が動くのなら体も動くはずだ。さあ次の組み手の順番はお前だぞ… たっぷり可愛がってやる！」

「ヒイイイーーー!？」

アッシュはそのまま連行されていき、その後寮に帰ってきたのは日にちが変わる直前だった。

俺が入学してからもう二週間程になった。流石に学校には慣れたが訓練の方はイマイチだった。元々訓練などしていなかったと言えばそれだけのことであるが今そんな甘い言葉は言ってられない。

俺は訓練の内容を思い出すが頭に浮かぶのはやはりクロスレンジ訓練のことであった。

「くそっ、手も足もでないなんて…！」

俺は唇をかみ締める。転生する前にやっていた剣道では負けはあってもこんなに無様な負け方は無かっただけにかなり悔しかった。そのときだった。

ピピピ、ピピピと携帯に着信があった。

「誰だ…？」

疑いながらも通話に出る。すると相手は

「もしもし、小野寺さんですか？ギンガ・ナカジマです」

「ギンガさん！？どうして俺の番号を　　って前に教えたっけか」

相手はギンガだった。しかし一体何の用だ？もう特に何も無いはずだが…？

「あの、明後日予定空いていますか？」

「明後日？えーと、あ、空いてるぜ。それがどうかした？」

明後日は訓練は休みなので寮でゆっくりするつもりだったので予定は無いに等しかった。

そう言うときギンガは「ではお会いできますか？」と訊いてきた。

（こ、これは俗に言うデートというやつか！？いや、待てよ。実はそうじゃなくてこっちのぬか喜びっていうオチかも。けど喜んでもいいんじゃない）

「一真さん、どうかしましたか？」

はっ！？いかん、どこか違う世界に行きかけてたぜ。浮かれすぎだ俺。

何とか平穏を保ちつつ会話を再開させ、明後日の9時に寮の前に待ち合わせということになった。

「では楽しみにしてます。それでは」

「ああ、明後日に」

そう言つて通話を解除した。

そーいや女性と出かけたのって何年ぶりだ？修学旅行の時も男連中とつるんでたし…まあいいや、そんなことは。とにかく明後日を楽しみにするか！

さて、やる事もないからもう寝よ

「カゝズゝマゝキゝサゝマゝゝゝッ！！」

「ギャアアアアア！」

ふと横を向いたらアツシユが恨めしそうに壁から半身を出してこちらを見ていたため思わず叫んでしまった。怖いわっ！

「おのれリア充め！貴様、女とデートなどさせんぞ！！」

「なっ！？何で知ってんだよ！」

「貴様が電話で話していたのを聴いたんだ！」

盗み聞きかよ！？なんて野郎だ！

アツシユは壁の角から飛び出すと「くたばれリア充ーッ！」と叫びながら俺に襲い掛かってきた。その目はマジで俺を殺^やる目だ。そこまで憎いかよ！

しかしアツシユは俺の親友^{ダチ}だ、手荒なことはしたくない…どうする！？こんなときは…選択肢だ！

・倒す

・やつつける

・殺^やる

「お前がくたばれボケがあー！！」

どうやら戦わなければ生き残れないようだ。だつたらやってやるぜ！返り討ちじゃあ！

そのまま俺達は殴りあい発展、その後間もなく駆けつけたゴリラ教官殿に成敗された。

約束の日の朝、俺は寮の前に出た。約束した時間より三十分も早かった。

「流石に早過ぎたかな…まあいいや」

と言うより部屋に帰れない。帰ったら確実にアツシユに襲撃される

からだ。そんなことしてたら時間に遅れてしまつかもれないからな。

俺はそのまましばらくボーっとしようとしていたがふと見えた人影を眺めたらギンガであつた。

「おはようございます、一真さん。待たせちゃいましたか？」

「おはよう、ギンガさん。大丈夫、待つてないよ」

そう言つとギンガは安心したような表情になつた。そして「今日はありがとうございます。まだ私からあの時のお礼をしていなかったの」と言つた。

なるほど、そういうことか。つまり俺が勝手にデートと勘違いした訳か。はははは…畜生！

「別に良かったのに…もう十分お礼をしてもらつたつて」

入学金を一部払ってもらつたり飯奢ってもらつたりとか結構してもらつたけどなあ。これ以上されると逆にキツイってゆうか…。

「でもそうでもないと会えないので　あつ、いや、忘れてください！」

ん？ギンガが縮こまつてるが何か言つたのか。つい考え事してたから聞いてなかったなあ…まあ本人が忘れてくれって言ってるんだから別にいいか。

「で、では、行きましょうか」

「そーだな。あ、俺まだ市街地のこととか知らないから案内とか宜

しくな」

「分かりました」

こうして俺とギンガは街へと向かった。

「ところで一真さん、もう学校生活とか訓練にも慣れましたか？」

ギンガに連れられ街に来て適当にぶらついてから俺達は休憩のために飲食店にいた。そして注文を待っている時にギンガがそう言った。

「まあ大分な…ただ訓練の方はちょっと」

「どうかしたんですか？」

ギンガは心配そうにこちらを見てくる。が、正直に言った方がいいのかそれとも笑って流すか…いや、下手に意地を張るより正直に言った方がいいな。訓練とかのキャリアは向こうが上だし。そう思ったこれまでのことを話した。

「なるほど…つまりクロスレンジ訓練で一方的に叩きのめされた、と」

グサツ！心にギンガの言葉が刺さって痛い。

「ああ。どうすればあの教官殿に一泡吹かせてやれるのか…」

「…一真さん、あなたは接近戦は苦手ではないんですよ。ですが、がむしゃらに突っ込んではいませんか」

ギンガが俺を見ながら言う。

確かに無我夢中で突進していった感じはあったな。

「確かにその傾向はあったな…そうか、だからいつも簡単に投げ飛ばされてるのか！」

「そうですね、多分動きが単じゅ　読み易かったからですな」

ギンガ、言い直す意味無いぜ…。けど確かに俺って単純な動きしか出来ないからな。言われた通りだ。

ギンガは軽く咳払いをすると再び話し出した。

「一真さん、クロスレンジの基本は『一手先を読む』ですよ。そのことを心がけてみて動いてみてください。そうしたら今までより動きやすいはずですよ」

「一手先を読む、か…分かった。よっしゃ！次は投げ飛ばされたりしないようにするぜ！アリガトな、ギンガ」

まさか年下のギンガに教えられるとはな、思ってもなかったぜ。しかしもう簡単に投げられたりしないぜ、教官殿。
心の中でそう思う俺だった。

次の日、いつも通りの訓練が始まった。大体の訓練はそれなりに出来るようになったのでさほど苦労はしていなかった。そして最後のメニューであるクロスレンジ訓練が始まった。

（『相手の一手先を読む』。これを忘れないように…！）

俺が心の中で念じている最中も次々と挑んでいった訓練生達は投げ飛ばされていった。そうして俺の順番になった。

「おうー真…気を付けろよ…」

俺の前に順番だったアッシュが俺に話しかけてきた。ボロボロの様子を見る限りどうやらコテンパンにやられたようだ。

「分かってる。今日は一泡吹かせてやるぜ」

「マジか…ま、せいぜい頑張ってくれ。俺は…ログアウトする」

そう言っアッシュは力尽きたかのように倒れる。俺は周りの奴等と一緒に適当に移動させると戦場^{いくさば}へと歩いていった。

「ほう…眼つきがいつもと違うな。これは楽しめそうだな」

「その余裕、消してやるぜ！」

そう言っ俺はベルトのレバーを引き、ブレイドへと変身しダン教官へと向かっていった。そして全力で殴りかかる。

「おいおい、結局いつも通りか!?!」

ダンはその簡単に避けるとクロスカウンターを狙って俺の顔目掛けてパンチを打つ。今までの俺ならそれを喰らい、一方的に攻撃されていただろう。だが

（『一手先！』）

「ウオオオオオ！！」

俺はそのパンチを姿勢を低くして回避して逆に体当たりをダンの胴体に喰らわす。

「グッ！」

ダンは一歩下がる。そこへ追撃を掛けるようにキックを放つ。

「オリヤア！」

「ヌッ…フンッ！」

しかし俺のキックは受け止められ逆にダンのカウンターパンチが腹に決まりそうになる。

（これも予想済みだ！）

が、この展開を予想していた俺は左手でバリアを発生させそれをガードする。そして逆の手でブレイラウザーを持ち、斬りかかる。

「やるな…だがっ！」

しかしダンも伊達に教官をやってはいない。一真と同じくバリアを発生させてブレイラウザーを受け止めると腹にキックを打ち込む。さらに追い討ちでハイキックを打ち込み最後はドロップキックを放つ。

それを喰らった俺は後ろへ飛ばされる。そしてなんとか受身をとって立ち上がる。くそっ、ここはプロレスリングじゃないぞ。

「やるようになったじゃないか。どうだ、次の一手でこの勝負を決めようじゃないか。お前の体力が尽きないうちにな」

ダンが俺にそう提案してきた。

正直ありがたかった。俺もさっきは上手くいったが次も上手くいくか分からなかったしな。それにダンの攻撃は確実に俺の体力を削っていた。それもチート並に。コイツ本当にゴリラなんじゃないのか？

「後悔すんなよ！」

そう言っただ俺はブレイラウザーから二枚のカードを引きそれをラウザーに切る。

【キック、サンダー。ライトニングブラスト】

「いくぜっ！ウオリヤアアア！」

俺はライトニングブラストを発動させダンに向かっていった。ダンも体勢を立て直し、手に魔力を集中させてカウンターの一撃を狙っていた。

「ウオオオオオ！」「又ウン！」

そして二つの力がぶつかった。その先は覚えてない。気がついたら寮の部屋だった。

第六話 クロスレンジの極意（後書き）

まあボチボチ頑張っていけます。

第七話 合同演習（前書き）

遅れてすみません。なるべく早く投稿していきたいです。

第七話 合同演習

まだ日が昇った頃の時間帯。俺は一人ランニングをしていた。

「しかし、正直信じられねえな」

信じられないこと。それは先日のクロスレンジの訓練のことだった。あの後気を失っていたが俺はなんとあの教官を倒したらしいのだ。

「ギンガから」大切なこと」を教わったこともあるし、ブレイドに登場するライダーは『装着者の感情によって融合指数が高まり強くなる』という仕様なため、あの時の俺の”勝ちたい”という気持ちに反応して一時的にだが強くなれたのだろう。と、俺は思っている。

「これで俺も一人前の魔導師に近づけたのかな」

その答えは俺には分からない。だから進み続けるんだ、一步一步先へと。

「よっしゃ、今日も頑張りますか!」

俺はそう言ってランニングのペースを上げた。

「今日は他校との合同演習だ。市街地での実践を想定で各校二人づつ、フォーマンセル四人一組でのチームを組んでの演習だ。実践に近いから気を抜くなよ!」

朝の訓練前の朝礼でダン教官が前に立って今日の訓練の説明をした。まさかの他校との合同四人一組か…なかなか面白そうじゃん。しかし一体どこの学校と合同演習なんかするんだ？そんな話一切聞いて無いぞ。

「この”情報発信局”の俺が知らない情報があったとは…一生の不觉っ！」

何言ってるんのお前？　と言いたげな顔をして隣で頭を抱えてるアツシユを見る。大体いつからそんなあだ名があった。そのとき、見知っている人物と遭遇した。

「ギンガ！？」

「えっ…一真さん！？」

「まさか相手がギンガの学校とはなあ。知ってた？」

「いえ、私も昨日他校との合同演習があるとしか聞かされてませんでしたし。けど、一真さんがいてくれてよかったです」

「俺も。やっぱり知り合いがいると安心するしな」

「ですよね」

「ははははは（ふふふふふ）」「」

「俺もいること忘れてません！？何俺のこの空気っぷり！」

横でアツシュが叫んでいる。まったくコイツはいつも五月蠅いなあ、少しは大人しくできないのかよ。ま、逆に急に静かになられちゃそれもそれで気持ち悪いが。

俺はふと、ギンガと一緒に付いて来た人物に目を向けた。どうやら女子生徒らしいがギンガの友達かな？

「あ、あのえと…わ、私はリイナ・ウェーバー、です！よ、よろしくです！」

俺と目が合った瞬間にその女性はかなりテンパって自己紹介をしていた。つかそこまで慌てる必要は無いんじゃない？それに最後噛んだな。

「彼女はちょっと人見知りするらしくて初対面の人にはこんな感じなんです、けど良い子なんですよ」

すかさずギンガがサポートをいれる。まあ悪い奴だとは思えないけどな。俺は分かる、こんなにテンパる奴が悪い奴なはずがない、と。

「それは何となく分かるよ。んじゃ、とりあえずはこの面子で決まりか」

周りを見ると大体の奴等はまだ決まっているようだった。一応確認を取ると皆了承してくれたため、このチームで演習に参加することになった。

「いいか、今回はこの廃墟地域が戦場だ。ルールは簡単、相手のチームを戦闘不能にしろ、以上！では初め！」

ダン教官の声が演習地域全体に響く。

どうやら俺達はランダムに配置されているらしく周りには他のチームはいないようだな。

「じゃあ今のうちにデバイスとかを見せ合って役割とか決めときましようよ」

とギンガが提案した。確かにそれもそうなので「それもそうだな」と相槌を打つとアッシュとリナも賛成してくれた。

「まず俺はこれ、ブレイバツクルだ。これを使うと俺は変身…まあこうなる」

俺はそう言いバツクルを装着し、レバーを引く。そして『ターンアップ』の音声と共に現れた『スピリチアエレメント』をくぐりブレイドへと姿を変える。

「ひゃあっ！す、凄いです！こんなの、始めて見ました　わあっ！？」

この姿を初めてみたリイナは驚きながら、転んだ。えっ？何でここで転ぶんだ　ってこれは

「B A N A N A ! ?」

どうやら驚いた表紙にバナナの皮を踏んだらしいが　なんでここにそんな物があるの！

「おい大丈夫か？よつと…」

とりあえず転んでいるリイナを起こす。つかこれは人見知りだけじゃなくてドジっ子属性持ちだよ、絶対。

「そんじゃ俺の番だな。俺はこの俺専用デバイス、その名もアッシュカスタム！」

そう言つて自信満々にデバイスを見せ付けるアッシュ。自慢のデバイスをみるとそれは　ただのストレージデバイスだった。

「あの、これが専用デバイスですか？見たところあまり変わりはないように思われますが…」

ギンガも拍子抜けしたらしくアッシュに訊いていた。だって専用つっても他の奴等の使ってるのと色がちよつと違うだけだもんな。

「いいんだよ！色が赤けりゃ専用機で性能も三倍なんだよ！」

ギンガに指摘されアホなことを叫ぶアッシュ。つか言つとくがシアザクは性能が三倍じゃないぞ。せいぜい25パーセント増し程度だからな。三倍の性能ならガン　ムを軽く凌駕してるわ。

「じゃあ私ですね。私はこの『リボルバーナックル』と自分で作ったローラーです」

そう言つてギンガは左腕と右足を少し前に出す。つかナツクルも凄
いが自作のローラーつてのがカーナリー気になるな。

「そのローラーつてどうゆうの？」

そう俺が訊くと「魔力を通して稼動するようにしてあります。あと
はウィングロードを展開させたりとかです」と答えた。多分ウィン
グロードつてのはあれだ、空中を歩けたりするやつだろう。名前で
想像付くぜ。つーかデバイスつて自作出来たり出来るのか…今度作
つてみつか？

「じゃあ最後にリナ、お願い」

そうギンガに言われて「ふぁいいい！」とリイナが前に出てきてお
ずと右手を突き出す。

そこにはデバイスが付いていた。一言で言うなら盾だ。タジャスピ
ナーみたいな。おそらくはシャマルの『クラールヴィント』と同じ
ような感じだろうから後方支援タイプなんだろうな。

まあこれでフォーメーションが組みやすくなったな。さてと、じゃ
あ決めますか！

～三分後～

俺、ギンガ クロスレンジ
近接戦闘

アツシュ、リイナ 後方支援

大体こんな感じになった。特に反対意見も無いためこれで大丈夫だ
ろう。さて、どこからでもかかってこいや！

「あの、み、見つかったりしませんかねえ？なんかそんな気がするんですが…」

バカそれはフラグだ　　そう言う間も無く攻撃が飛んで来た。どうやらやっぱりバレたらしい。こうなったら徹底抗戦だぜ！

「よっしゃ！皆、後は手順通りに頼むぜ！」

そう言つて俺は相手のチームに突撃していきすぐにギンガも俺の後に続いてきた。俺とギンガの役目は言わば切り込み隊長つてところからな。

「よっしゃ、任されて！いくぜ弾幕全開い！スペルカードオー！」

「そ、そんなに撃つたらす、すぐに魔力が尽きてしまいますよ！それに後半の台詞はじ、自重してください！叩かれます！」

早速ちよつと後ろが不安だが何とかなるだろ、そうに違いない、そう思いたい。

「ギンガは右から、俺は左をやる」

「分かりました、気をつけて！」

そう言い合うと俺とギンガは左右に展開する。敵のチームは俺とギンガを視線で追うがその間に先ほど後方の二人が撃った攻撃が相手の真正面に飛んでいった。

いいぞ、上手い感じに動きを制限させてる。これなら　　畳み掛けれる！

俺はすぐさま腰からブレイラウザーを引き抜き相手チームの先頭で攻撃を仕掛けようとしていた奴に切りかかる。

「うわあああ!？」

ソイツはギリギリでバリアを発生させ、一撃を回避するも俺はパンチを放ち怯んだところをダン教官受け売りの一本背負いで投げ飛ばす。さらに俺はブレイラウザーに【キック】のカードをスキャンさせ【コーカロスキック】を発動させ強烈なとび蹴りを起き上がりかけている相手に喰らわした。相手の奴はBバリアジャケットJも解けて気を失っていたためそのままバインドを掛けておく。

「っしやあ！次はどい」

『後方から攻撃が来ます。回避を』

俺の声を遮るように機械的な音声が聞こえた。俺は咄嗟に横っ飛びをして後ろを見るとそこにはデバイスの先端を俺に向けた相手の生徒がいた。その生徒は俺に魔法弾を発射してくるが、それをブレイラウザーで弾きながら俺は接近し、ラウザーでデバイスを払う。デバイスはそのまま宙を舞い俺の背面の地面に落下した。

「ヒイツ!」

「…すまない」

（丸腰の相手に攻撃するのは気が引けるけど…実戦訓練だからな）
そう思いつつ【ディアーサnder】を発動させ、気絶したところをバインド。

（さっきの声ってもしかしくなくても…ブレイバツクルだよな）

以前にマリーさんにデバイスの機能を付けてもらったことを思い出した俺はバツクルを見つめる。今までは喋ったりして無かったからストレージデバイスかと思ってたぜ。

「助かったぜ、サンキューな」

『当然のことです』

おおっ、話しかけたら反応してきた。つか日本語なのねコイツは。まあコイツとはこれから関係を深めていくとするか。

ふと周りを確認するとどうやらギンガも相手を鎮圧していた。つか相手二人とも完全に伸びてるぞ、おい。

「おゝい大丈夫だよな」

声の聞こえた方を向くとアッシュとリイナがこっちに走ってきていた。

「どうよ、この俺の凄さは！あの弾幕の強さは！」

相変わらずすぐ調子に乗る奴だが、後方からの援護には感謝しているのでここは好きに言わせておくか。

「ところでこの後はどうすればいいんですか？相手のチームの方々も放置するわけにはいかないです」

ギンガがこちらを見ながら言う。確かにそうだな、どうすりゃいい

んだろうな…ここは脳内選択技だ！

・放置プレイ

・トドメを刺す

・嬉しくなるとつい、ヤツチャウンダ

畜生、俺の脳内が死んでる。ここは他の意見に任せよう…

「やっぱりほつとこうぜ」いろいろとメンドイし」

「ですがやっぱり放置は…」

「いいんだよ！負けた奴が悪いんだよ！弱肉朝食だよ！」

アッシュ、強食だ。

アッシュとギンガが若干揉めそうになりそうな気がしたため俺が落ち着かせようとしたとき、リイナが口を開いた。

「あの、先生に報告すればいいんじゃないでしょうか…」

「…」

その手があったか！

第七話 合同演習（後書き）

課外授業って面倒くさいよね。受けなきゃよかった…

第八話 だったら俺はこの赤い扉を選ばぜ！（内容とは全く関係ありませんwww

いやー、ダルイねえ。宿題何にもやってないよーwww

第八話 だったら俺はこの赤い扉を選ばぜ！（内容とは全く関係ありませんw）

あの後教官に報告したら「しまった、言い忘れていた。戦闘不能になったチームはバインドで拘束。演習終了までそこで反省しておくように」と言い、すぐ後に通信で全チームへ連絡がされたようだ。そうゆうことはしっかりやってくれよ教官…。

「よし、んじゃこれからどうするよ。一狩り行きますか？」

そう言つてアッシュがデバイスを担ぎながら歩いて行こうとして、足元の瓦礫に足が躓いて派手に転倒し、その拍子に壁に激突した。ゴンッ、という音とヒギャツという声が同時に聞こえた。

「大丈夫かアッシュ！？」

すぐさま俺達はアッシュに近寄る。

（よかった。大して外傷は無いみたいだ）

ざつと見てそう判断した俺はアッシュを起こす。痛がっているけどコイツなら大丈夫だろう。

「アッシュさん大丈夫ですか？」

ギンガが心配そうに訊くので大丈夫だと言つたらギンガとリイナの二人とも安心していた。

アッシュも回復したようなので移動するためにアッシュがそこを立った。するとそのぶつかった場所に穴が開いていた。

「何だこれ？一体何の穴だ？」

ちょうど人がギリギリ入れそうな大きさみたいだ。うゝむ、何処に
続いているんだ？

「ちょっと入ってみるか」

「危ないですよ！一体何処に続いているか分からないのに！」

グツと、ギンガが俺の腕を掴んで静止させる　　って痛い痛い！！
力強いってギンガさん！

「…わ、私が調べましょうか？」

俺が腕の痛みに耐えている隣でリイナがそう言った。マ、マジか。
この痛みに耐えてでも入るってのか？

「頼めますか？」

「任せてください」

アレー！？すんなり了承しましたねえ！俺みたいに腕掴まないの、
凄え力で。

リナは魔方阵を足元に展開しスツと右手を突き出しデバイスから球
体を複数発生させてそれを穴の中に進入させた。

「何あれ？」

アッシュに訊く。

「エリアサーチ。魔力で生成した「サーチャー」っつー多数の端末を飛ばしてサーチャーから送信される視覚情報により、端末の届いた範囲全ての視認探索が可能とする魔法だ。これぐらい基本だ」

…まさかアツシュに魔法の説明されるなんて…チクショー！凄え悔しい！何でお前が知ってるんだよ！

「アツシュさんって以外に魔法のこととかの知ってるんですね」

やっぱりギンガも意外そうな顔してるな。まあコイツはパツと見て勉強とかしないで遊び回ってそうな顔してるからな。実際その通りだけ。

「俺だつて勉強ぐらいするわ！一体俺をどんな風に見てたんだよ」

「チャラ男」

「…同じく」

「テメエ等喧嘩売ってんのか！？上等だ、そんなら」

「皆さん！な、中に稼動している生産施設プラントがあります！」

アツシュの叫びを遮るようにリイナが声を張り上げて言ったため思わず三人とも固まってしまった。

「生産施設プラントって一体何のために？もつと詳しく説明できないか？」

生産施設プラントがあるのが分かったけど一体何を作ってるのか分からないからな。出来ればそこら辺を詳しく説明してもらいたいぜ。

「それが、中心部にA M Fが展開していて生産施設^{フロント}つてことしか分かりませんでした…」

事情は分かったけどA M Fという単語が理解できず俺は頭を捻る。
あー全然分からんのう。

とりあえず穴の中を覗く。真つ暗だが穴は下に続いていると分かる
と行ってみたくなるな。その生産施設^{フロント}がもし犯罪に使われているもの
のだとしたら大変だしな。

「生産施設^{フロント}にA M Fか…怪しいな」

「そうですね。ただの生産施設^{フロント}ならそんな上位魔法はいらないはず
ですから…一旦教官達に連絡しますか？」

「そうしましょう、か、一真さんもい、良いですか？」

「ん？ああ、そうしてくれるか」

どうやら俺が穴見てる間に三人で何か話し合ってたみたいだな。ま
あこれは俺達よりも教官とかの方に任せた方がいいかもな。

「よし、そんじゃ早速報告しようぜ！」

そう言つてアツシュがデバイスの柄で地面を叩いた。すると　ボ
コッ！と三人の周りの地面が陥没して地下に落下していった。

「「きやああああ！！」」

「ギヤアアア！」

「何っ!？」

すぐさま走って手を伸ばす。その手は落ちかけていたアッシュの手を掴んだ。

「大丈夫かアッシュ!？」

「だ、大丈夫だ!けど二人が!」

そう言っアッシュは下を見る。土煙が上がってよく見えないけどどうやら二人はこの下に落ちたようだ。

アッシュを引き上げた俺は二人を追って最初に見つけた穴に飛び込もうとした。しかしそれをアッシュが止める。

「待てよ!中にはAMFが張ってあつて魔法が使えないんだぞ!俺達だけじゃどうにも出来ないって!」

「大丈夫だ、問題ない!お前は教官達に連絡をしてくれ」

そう言っ俺は穴に飛び込んだ。魔法が使えないか、そりやアイツも止めるわな。けど魔法は使えなくても、ラウズカードは使えるんだよ!

「変身!」

落下しながら『スピリチアエレメント』を通過し、ブレイドへと変身した俺はブレイラウザーを穴の側面に刺して落下速度を緩めながら下りていった。

（二人とも無事でいてくれよ！）

「…思ってたよりも深いな、20メートルぐらいか？」

地面に足が付いた俺は変身を解いて周りを見える。やっぱり何かの生産施設プラントのよう^フでいたる所にカプセルみたいなやつがある。中には生きているのかもよく解らない生物がいる…キモッ！
それよりも落ちた二人を探すために俺は進んでいった。

「この高さから落ちて怪我とか大丈夫か？…」

何せこの高さだ。いくらバリアジャケットがあるからといっても、もしかしたら怪我していてもおかしくはないからな。
そう思っていた矢先、何処からともなく声が聞こえた。

「どうやらまだ侵入者がいたようだな」

「なっ！？誰だ、何処にいる！」

周りを確認しながら叫ぶ。だが何処にも声の主はいなかった。

「貴様といい先ほどの小娘二人といい、どうしてこの場所が分かったのか不思議に思うわ」

小娘二人…まさか！？

「デメエ！二人をどうした！」

声が届いているのか分からないのに叫ぶ。すると声の主は「この小娘の仲間か…面白い」と言うと、

「この二人を助けたくば、ここまで来い」

と言って一方的に話を中断させやがった。そして一つの通路以外の明かりが消えた。

「誘ってるのかよ…上等だ！二人とも待ってるよ」

俺は全力で走り出した。

「二人は何処だあ！」

通路を進み明るい場所へと出た俺は真っ先にそう叫んだ。すると奥から奇抜な格好の人物が現れた。

俺はその人物を見て言葉を失った。なぜならその人物は俺の知っている人物だったからだ。

「お前は地獄大使！」

俺の前にはあのショッカーの幹部の一人、地獄大使が現れたのだ。そっぴや前にもショッカー戦闘員が出てきたことあったけど、コイ

ツが裏で糸を引いていたのか！

「又、貴様何故私の名を知っている？…まあいい」

地獄大使はそう言うと言手をバツ、と上げた。すると俺から見て右側の壁が左右に開いていった。

そこにはギンガとリイナが檻の中で倒れていた。

「ギンガ！リイナ！」

俺が二人を見て驚くのをみて地獄大使は高笑いをし始めた。
俺はそれに腹が立ち奴を睨む。

「テメエ！二人に何をした！」

「何もしておらんわ。まあ…五月蠅いのを黙らせたがなあ」

「テ、テメエ！」

俺はブレイラウザーの刃を地獄大使に向けながら言う。

「俺はテメエを許さねえ！」

「フッフ、なら死ねい！行け、我が忠実なる僕よ！」

地獄大使がそう叫ぶと何処からともなく戦闘員、そして怪人が現れた。

「何っ！？怪人までいるのかよ！」

ざっと数を確認する。戦闘員は大体20人前後、んで怪人は13体か。つかコイツ等って旧1号に倒された怪人じゃねえか！俺はバツクルのレバーを引いた。発生した『スピリチアエレメント』が俺を通過し、俺は仮面ライダーブレイドへと変身する。

「その姿…貴様まさか仮面ライダーか！？」

地獄大使が俺を見ながら声を荒げて叫ぶ。俺はその問いに

「その通りだ！俺は小野寺一真、仮面ライダーブレイドだ！」

そう答えた。

第八話 だったら俺はこの赤い扉を選ばぜ！（内容とは全く関係ありませんww

地面が抜けた理由は次回で説明する予定なんで、ご都合とか思わんでくださいwww

第九話 決意と奇跡（前書き）

なんか凄い焦って書いたんでかなりメチャクチャですwwサーセン
ww

第九話 決意と奇跡

「憎き仮面ライダーめ！殺せえ！」

「『ブワアア！』『』『』」

地獄大使の叫び声が響く。その声に反応するように声を荒げながら戦闘員、怪人が俺に向けて突っこんできた。

「いつくぜええ！！」

俺も負けじと声を張り上げながら突進していく。本当はすぐに二人を救出したいのだがこの数が相手じゃそれは無理そうだ…それなら

（速攻で片付けてやるぜ！）

正面から戦闘員が飛び込んでくるのをブレイラウザーで切り裂き、そのまま前にいる戦闘員×2をも切り裂く。切り裂かれた戦闘員は泡のように消えていく。

（相変わらず気持ち悪い死に方、だなっ！）

そう思いつつ、後ろに回りこんださそり男に右足でバックキックを喰らわす。さらにその流れで今度は右にいるヤモガラスを蹴り飛ばす。

このまま押し切れるか　そう思った俺は【スラッシュ】のカードを発動する。そして切れ味が上がったラウザーでサラセニアンを一刀で切り裂いた。

「っしやあ！このまま押し切らせ」

「甘いなあ！」

ブシャア！という音と共にそんな声が聞こえた、と思った矢先であった。俺の体は謎の物体によって縛られて身動きがとれなくなってしまった。

「これは…糸！つーことは蜘蛛男か！？」

俺が横を向くと案の定、そこには蜘蛛男が糸を口から出していた。

「その通りだ！これで貴様は身動き出来まい」

そう言うのと蜘蛛男や他の怪人が一斉に俺に襲いかかってきた。反撃しようにも両手は使えないし、魔法はAMFで使えないし、足も縛られて上手く上がらない…正に万事休すだ！

「グッ！ガハッ！ガッ、グッ、グヘア！」

身動き出来ない俺に怪人たちの攻撃が次々と当たる。顔や胴体を何度も何度も殴られ蹴られた。そして立つことも辛くなり、その場に倒れてしまった。

「トドメは任せな」

そう言われた怪人たちは俺の周りから離れていく。何故なのかと思ひ声が聞こえた方へ顔を向けるとそこには

トカゲロンが爆弾ボールを蹴る瞬間が見えた。

（や、ヤバイ！）

そう思っても体は動かない。そしてトカゲロンはボールを蹴って、それは俺に命中した。

ドガアアアン！！

そんな音が聞こえたと同時に俺の体は物凄い衝撃に襲われた。

「ガアアアアアアアアアアア！！」

そのまま壁に激突し、痛みあまり声を張り上げる。もう意識がぶっ飛びそうだ。体を縛っていた糸も切れているが立つ力は残ってないだろう。

その姿を見て地獄大使は心底嬉しそうに言った。

「フハハハハ！所詮貴様等など我が偉大なるショッカーには勝てないのだ！」

そう言っただけで再び笑う。その憎たらしい顔に一発殴ってやりたいが体が言う事を聞かない。

「フン。もういい、殺せ！…安心しろ、この二人もすぐにお前の後を追わせてやる」

そう言い地獄大使は檻の中の二人を見る。

その言葉を聞いた瞬間、俺の中の何かが弾けた。体の痛みなんて無くなった。あるのは…怒りとも憎しみかも解らない不思議な何かだ。

「ヤ・メ・口オオオオオオオオ!!」

俺は立ちあがり、叫ぶ。

「お前等なんかに、二人を殺されてたまるか!」

すると地獄大使は俺を蔑むような目で見ながらこう言った。

「貴様一人で何が出来るといふのだ? その身体で!」

「うるせえ! たとえどんなに可能性が低くても! そこに救える命があるなら! 俺はそれを救いたい!」

声を張り上げて俺は叫ぶ。そしてこれは自分へ言い聞かせているようなものでもある。

「馬鹿馬鹿しい。ならば」

そう地獄大使が何か言いかけたときであつた。

「よく言つたぞ!」

そのような声が聞こえた。そして地獄大使の後ろにある大きな装置が光り始めた。

「な、何だ!？」

「これは…何事だ!？」

そして光が一瞬強まった時、奥から二人の人物が飛び出してきた。
そして二人は俺の前に着地する。

「！あ、あなた達は！」

その人物は俺が小さい頃から憧れていた人だった。

「き、貴様は……！」

地獄大使も驚いているようだった。

そして俺と地獄大使は図らずも同時にこう言った。

「『ダブルライダー！』」

第九話 決意と奇跡（後書き）

はいー、ダブルライダー光臨ww

これは最初にやりたいと思ったことでしたー、完全に自己満足です
ww

第十話 戦え！ダブルライダー（前書き）

「宇宙キターッ！」 始まりました仮面ライダーフォーゼ！果たしてどのような物語になっていくのか、これからに期待です！

第十話 戦え！ダブルライダー

「ええい、何故貴様等がここにいるのだ！」

地獄大使が声を張り上げて叫ぶ。すると二人は振り返り地獄大使を指差しながら言う。

「お前の作戦は全て把握させてもらった。お前が”パラレルワールド 平行世界”で組織の戦力を増やそうとする作戦を！」

「だが俺達には平行世界に行く方法が無かった…だが、謎の光に包まれたと思ったらこの世界にいたという訳だ」

謎の光…？詳しくは分かんが、その光が二人をこの世界に連れて来たのか。スゲーな、おい。

地獄大使は「おのれえ！」と低く唸ると残っている怪人及び戦闘員に向けて命令をとばす。

「全員生かして返すなあ！かかれーっ！」

一斉にこつちに怪人や戦闘員が向かって来た。

俺は戦うために前に踏み出す、しかしそれを二号に制された。

「っ！何故です！？」

「ここは俺達に任せな。それよりもあの二人を助けてやれっ」

そう言って二号は二人が閉じ込められている檻を目で指しながら一号と共にショッカー怪人達に向かっていった。

俺はそれを見届けるとすぐに二人が閉じ込められている檻に向かっ

て走り、檻の前に来てブレイラウザーで鉄格子を斬り中に入って二人に駆け寄った。

「二人とも大丈夫か！？ギンガ！リナ！」

二人に呼びかけながら、怪我などが無いか確認する。よかった、特に外傷は見当たらない。

するとギンガが意識を取り戻し、直後にリナも目を覚ました。

「か…ずま…さん？どうしてここに…？」

「勿論助けるためだって。けどこんな展開だとは思わなかったぜ」

と言った矢先、コブラ男が檻の中に進入してきた。

俺は二人を庇うように立ち、ブレイラウザーから【ビートライオン】を取り出しスキャンする。

コブラ男は炎を発射しようと構える。その隙に俺はラウザーをヤツ目掛けて投げた。予想外のことに動揺したのかコブラ男は回避行動をとらず、ラウザーはヤツの頭に刺さる。

「グギヤアアア！」

「これで…トドメだあーっ！」

既に【ライオンビート】を発動していた俺は接近し刺さったラウザーを引き抜くのと同時に逆の手で渾身のパンチを決めた。

「グビヤアア！！！」

断末魔を上げつつコブラ男は爆発する。その音に気付いた怪人や戦

闘員がこちらに狙いを定めてきた。

「ヤベツ…二人ともここに隠れてくれ！絶対近づかせないから！」

そう言っただけでも檻から飛び出して迫り来る戦闘員や怪人たちを迎撃する。すれ違いざまに戦闘員を切り裂き、正面にいる蜂女の剣での攻撃を捌く。

そのまま罅迫り合いになっていくときである。蜂女が体勢を崩したというよりも別の場所から攻撃されたような感じで

（まさか！？）

檻の方を見るとそこにはB.Jバリアジャケットを装着したりナガステインガーレイで蜂女に攻撃していた。

しかしそこにギンガの姿は見えなかった。何処にいるか探すようにしたときに蜂女が苦痛の声を上げていた。振り返るとギンガが蜂女にリボルバーナックルでの一撃を決めていて、殴り飛ばされた蜂女は壁に衝突して爆発した。つーか俺よりも威力高くないか？

「一真さんだけに戦わせるわけにはいきません。私達も戦います」

そう言いながらギンガはこちらに振り向く。

「も、元々私達のせいでこのようなことになってしまったので…自分の身ぐらいはなんとか」

リナもそう言いながらやって来た。二人とも決意の固まった目をしていた。

こうなったら言っても聞かなさそうだな…二人を信じよう。

「…分かった。けど絶対に死ぬんじゃないぞ！」

「トウツ！」

一号は高く飛び上がり空中で前転をし、必殺のライダーキックを蝙蝠男に決めた。蝙蝠男はライダーキックを喰らってきりもみ落下していき、爆発した。

二号も渾身のライダーパンチを蜘蛛男に決めて倒していた。

ダブルライダーの実力の前に次々と怪人、戦闘員が倒されていき、残るは僅かな戦闘員とゲバコンドル、トカゲロンの二体の怪人だけになった。

「地獄大使！お前の悪事もここまでだ！」

「大人しく俺達に倒されな！」

ダブルライダーがそう言うのと地獄大使は悔しそうに唸ると鞭を地面に叩きつけて叫ぶ。

「おのれえ！戦闘員、例の手段だ！やれえ！」

地獄大使がそう言った瞬間、戦闘員達がライダーに纏わり付いてきた。

「くっ、何のマネだ！？」

「コノツ、離れる！コイツ等！」

ダブルライダーは引き離そうとするが戦闘員は離れない。ソレをみて地獄大使は言った。

「では味わってもらおう…人間爆弾の威力を！」

そう言った瞬間、ライダーに纏わり付いていた戦闘員達が一斉に爆発した。

「ぐわあああ…！」

ダブルライダーは爆発に吹き飛ばされて転がる。木っ端微塵になることはなかったがダメージは大かった。

「フハハハッ！良いザマだ。さあ、トドメを刺せ！」

そう言われてゲバコンドルとトカゲロンはダブルライダーに接近する。ダブルライダーもなんとか立ち上がろうとするが間に合わない！

「コレデトド」させるかーっ！『グヘアッ！』

しかし、ゲバコンドルが飛びかかろうとした瞬間に何者かがそれを妨害した。一体誰なのか？ そう思った1号は顔を上げた。そこには

「テメエ等の相手は俺達だぜ！かかってきな！」

一真、ギンガ、リナの三人がダブルライダーを庇うように立っ

たのだった。

第十話 戦え！ダブルライダー（後書き）

相変わらずのこのクオリティ、一向に成長するどころか劣化していつてる気がする…。

第十一話 決めろ！奇跡のキック（前書き）

相変わらずのグダグダクオリティでございますWWW

第十一話 決める！奇跡のキック

「いくぜえ、テリヤアア！」

俺はゲバコンドルに斬りかかる、がそれはあつさりと避けられ逆に反撃のパンチを貰う。だがそれによって僅かな隙が出来た。

「そこです！」

ギンガのリボルバーナックルがゲバコンドルの脇腹に決まり、大きく吹っ飛ぶゲバコンドル。俺はというと倒れつつ受身を取り威力を減らした。

「サンキュー、ギンガ！いくぜええ！」

勢いよくゲバコンドルに突撃し、ブレイラウザーで斬りつける。先ほどのギンガの一撃で怯んだゲバコンドルに連続で斬撃が命中していく。全身に傷を負ったゲバコンドルは空中へ逃げようとしたが足を持って引きずりおろした。

「グッ、キサマ！サツキトハツヨサガチガウゾ！」

息も耐え耐えになりつつもそう言ってくるゲバコンドルに俺は言う。

「俺は守れるものが存在してる間は全力全開になるって決めてるんだよ！テメエ等なんかにやられてたまるか！」

そう言っただけでラウザーを倒れているゲバコンドルに全力で突き立てる。その一撃でゲバコンドルは完全に絶命した。

俺はラウザーを引き抜くとトカゲロンの方を見る。トカゲロンの方はリナが足止めをしていたが状況はリナの方が部が悪いようだった。

「ス、スティングーバレット！」

リナの『アルテミス』から大きな魔力弾が発射され、ソレはトカゲロンの目の前で大きく拡散し全身に小さい魔力弾が命中する。

「グ…ソナモノオ！」

だが強力なAMFが張られている状態では全力では撃てなかったのか、トカゲロンには大きなダメージは入らなかったようで怯みはしたが仰け反らせるまでには至らなかった。

反撃にトカゲロンは爆弾ボールをリナに向けて蹴る。

「プ、プロテクション！」

素早く『アルテミス』を突き出し、発生したバリアで爆発と衝撃を耐えるリナ。だがトカゲロンは何所からともなく大量のボールを出し、連続で蹴る。

「キャッ！ま、まだ持ってください…アルテミス！」

リナがそう言うと『アルテミス』の表面にあるコアが光り、バリアがより強固な物になった。トカゲロンは中々壊せないバリアに苛立ちを感じ始めていた。しかしボールもラスト一個になってしまった。そこに俺とギンガが駆けつける。

「よく持ってくれたぜ、リナ！後は俺に任せろ！」

俺はリナとトカゲロンの間に立つ。

そういやコイツの爆弾でスゲー痛い思いをしたなあ…ちょっとぐらいお返ししてやりたいぜ。

「来いよトカゲ野郎。御得意の爆弾ボールだよ」

そう挑発をするとトカゲロンは物凄い剣幕で怒りだした。全く単純な野郎だ…俺も人のこと言えるか分かんが。

「キサマア！ユルサンゾォ！」

そう叫びながらヤツが爆弾ボールを蹴ろうとした瞬間、俺はとおきのカードをスキャンする、それは

「シネエエ！」

【マグネット】

【バッファローマグネット】それは周りの金属を引き寄せたり離したりする効果　所謂磁石の効果を得るカードだ。何故そんなカードを使ったのかというと

「ナ！ボールがアタツテナイダト！？」

そう、ボールを磁力で反発させているのだ。

俺はボールの形状、色などからボールの表面が鉄であることを予測し、このカードを使ったのだ。つか、もし違ってたらどうなっていたのか…怖いから考えるのはやめよう…。

「そらっ、お返しだ！」

そして反発する力を強くし、勢い良くボールを弾き返す。ボールは見事にトカゲロンの腹に命中して爆発を起こした。

「ギャアアアアアア！」

トカゲロンの断末魔が爆発音に消えていった。これで全ての戦闘員、怪人を倒したことになる。

俺は最後に残っている地獄大使に向けて視線の先を向けるとそこに立てるほどには回復したダブルライダーもやって来て隣に並ぶ。

「どうやら怪人は全て倒したようだな…礼を言わせてもらおう」

「アレを全部倒すとは中々骨のある奴みたいだな」

言いながらダブルライダーは構えを取る。

そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、倒せたのは俺だけの力じゃない。

「仲間がいたからですよ。信頼できる仲間が」

そう言うと二人は仮面の下で笑ったような気がした。俺もつられて笑ってしまう。

「ええい、忌々しい奴等め！こうなればワシ自らが！」

そう言うと地獄大使の姿が変わり、そこにはガラガランダが立っていた。

「くたばれライダーども！」

高台にいたガラガンダは下に飛び降りて、鞭のような腕を振り回し俺達を攻撃してきた。

「うおおっ！」

「トウツ！」

それを俺は前転で、ダブルライダーは飛び上がってソレを回避した。俺は立ち上がりと同時にガラガンダへと走り出す。

「ウエーイー！」

「グッ！」

ガラガンダに肉迫した俺はブレイラウザーを逆手に持って斬り付けた。ガラガンダは呻き声を上げ俺から距離をとった。それに乗じてギンガとリナも攻撃を加え始めた。

「私達もいきましょう、リナ！」

「はい！これまで練習したあの技をやってみましょう！」

するとリナはスティンガーレイをガラガンダではなくガラガンダに接近するギンガに打ち出した。俺は意味が分からず叫び出す

「は！？なにやってん」

「大丈夫です！」

そう言ったギンガは向かって来るステインガーをなんとリボルバーナックルで方向転換させガラガンダへ打ち出した。しかもそれはギンガの魔力とリボルバーナックルの威力を上乘せしたものだ。

「何い！？」

ガラガンダもこれには驚いたようで回避を取るのが少し遅れてしまい直撃を喰らう。

「今だ一文字！」

「おう、いくぞ！」

「「ライダーダブルパンチッ！！」」

そこへ先ほど飛び上がっていたダブルライダーが落下しながらライダーダブルパンチをガラガンダに繰り出す。

それを喰らったガラガンダは後ろの装置の近くまで殴り飛ばされた。

「グヌウウウ…まだだ！」

意気も絶えたえになりつつ立ち上がるガラガンダ。その前に俺とダブルライダーが揃い立つ。

「そろそろトドメの一撃といきましょう、二人とも」

そう言って俺は【ライトニングブラスト】を発動させ、飛び上がる。するとダブルライダーも同時に飛び上がっていた。

「いくぞ一文字！」

「おう、本郷！」

「そしてこの世界の仮面ライダー！」

それは偶然だった。

俺の『ライトニングブラスト』とダブルライダーの『ライダーダブルキック』が同時にガラガラランダに決まったのだ。
俺達は自然とこう叫んだ。

「『ライダートリプルキック！』」

奇跡の必殺技を喰らったガラランダは蹴り飛ばされ、そのままこの世界にやってくるために使った装置にめり込む。
その衝撃で装置のスイッチが入ったらしく、バチバチと音を立てながら光りだしていく。

「お…のれ、か…仮面、ライダー…」

そう言つて地獄大使は元の世界へ転送されていった。

「本郷さん、一文字さん、ありがとうございました。おかげで二人を助けることが出来ました」

俺は変身を解いて二人に近寄る。すると二人も変身を解いて俺と向き合う。

「俺達は何もしていない。助けたのは君自身だ」

「俺達はただ怪人と戦ってただけだ。謙遜すんなって」

本郷さんは静かに、一文字さんは俺の肩をバシバシ叩きながら言うてきた。って、一文字さん、肩痛いつて！力入れすぎ！

「ててて…ところで地獄大使はどうなったんですか？」

痛む肩を押さえつつ問う。すると二人は険しい顔になって答えた。

「ヤツはまだ生きている…俺達の世界でな」

本郷さんは言う。一文字さんも頭を掻きつつ「アイツ等しぶといからなあ」と言っていた。

それじゃ、やっぱ二人は「仮面ライダーが存在する世界」から来たことになるのか…？クソッ、難しい話は分らん！

「俺達のこととは心配すんなって。きっちし自分の世界は守るからよ」

一文字さんはそう軽そうに言うてるけど…実際は地獄のような戦いが続くことになるんだろ？そんなのって…

「俺達はショッカーには負けん。世界からショッカーの魔の手が消

えるまで戦い続ける」

そう言っている本郷さんの体は透け初めていた。

「なっ、どうしたんですか!？」

驚く俺に対して冷静に本郷さんは答えた。

「俺達も元の世界に帰らねばならないのだろう…まだ戦いは終わってないからな」

「そういうことだ。まー大丈夫だ」

そう言う一文字さんの体も透けだしていた。
すると本郷さんは俺に訊いてきた。

「君の名前は？」

俺は悲しい気持ちを抑えつつ答えた。

「俺は小野寺一真。仮面ライダーブレイドです!」

そう答えた直後、二人の姿は消えていた。

第十一話 決めろ！奇跡のキック（後書き）

はい、ようやく戦闘終了です。

この展開は連載当初から考えていた展開でしてね、ようやく終えることができました。

次回は他なのはキャラとの話です。

そんじゃ、サイナラ〜！

第12話 ひとときの平穏（前書き）

俺、しぶとく参上！

ってことでしぶとく生き残ってます。

第12話 ひとときの平穩

「一真さんあの…ありがとうございます。助けに来てくれて」

「か、一真さんとあの方達が来てくれなかったら今頃はもうなっていたか…」

ギンガとリナが俺に近づいて来て言う。

「ん？ああ、気にするなって。仲間を助けるのは当然だろ」

別に格好付けた訳でもなく本当にそう思ってることだ。仲間は助け合いでしょ。

そう言う二人ともイマイチ納得してないような顔になる。ってあれ？

「ウツ…！」

ヤベ…身体中が痛え…無理、しすぎたか…。

「一真さん！？」「」

二人が驚いたような声が聞こえたのを最後に俺の意識は途切れた。

あの後、俺達はアッシュが呼んでくれた教官達によって無事救出された。

そのまま病院に搬送された俺は4日間眠り続けていたようだ。しか

もあれだけボコボコにされたのに特に目立った怪我は無く、その後3日ほど入院してから退院した。

医療などには詳しくないのでそれが凄いかは解らないがともかく退院できたことは喜んでもいいと思う。ギンガやアッシュ達も見舞いに来てくれてカーナーリー、嬉しかったしな。

（しかし、退院直後に呼び出しつてのは…）

ちょうど病院から出たところで「迎えを用意しとるから早くきてくれんか」と関西弁で言われ、声が未だに耳に残っている。退院したことに關して一言も無しかよ、などと思いつつ迎えに来ていたヘリコプターに乗り込む（ちなみに初めて乗った）

「…で、何で俺はここに呼ばれたんだ？」

俺は前と同じく聖王教会本部、それも初めてカリムと会った時と同じ部屋に居た。

「何でつて…それは自分が良く分かってることやろ？」

紅茶やクッキーなどが乗ったテーブルを挟んで俺の向かいに座るはやてが言う。その顔と声は真剣味を秘めていた。

「貴方達が落ちた先にあつた場所のことです。調査したところ、何か実験施設の様なものが残されていました。あの地下には何があつたのですか？」

はやての隣に座るカリムが手にしていたティーカップを置きながら俺に言ってきた。同じくこちらにも真面目な顔で聴いてきた。やっぱりこうゆうことか…この世界じゃショッカーはいなかったもんな。

俺は一口紅茶を飲んで話し出す。

「違う世界にあるショッカーって名前の組織の研究施設があったんだ。ショッカーは人類を脅かす程の科学力を持っていて世界征服を目的として活動してたんだ」

「それってもしかして前に言ってた”ショッカー”と同じか？」

「ああ。そしてショッカーは…人々を捕らえて”改造人間”として自分たちの配下としていたんだ。脳改造でショッカーに忠誠を誓わせてな…」

はやての問いにそう答える。すると二人はあまりの事実にも声も出さずに驚いていた。それもそのはずだ。あれが特撮じゃなくて実際に起こってることだとしたら俺もこんな感じになるだろう。

しかし実際にショッカーはいた。そしてダブルライダーも。

「それで…ショッカーはどうなったん？」

はやては陰しい声で聴いてきた。

「脳改造を免れた改造人間…仮面ライダー1号、2号…通称ダブルライダーによって壊滅した」

（あの時どうして二人が来たのか理由は分からないが、二人が来なかったら今頃俺達は…）

自分の無力さに怒りがこみ上げて来た。俺にもっと力があれば…。

「しかし一真さん、この世界になぜ壊滅したはずのショッカーの研究施設が？」

「えっ… ああ、詳しくは分からないけど… 多分ライダーによって壊滅させられるよりも前の時間から来んだと思う。それなら納得できる」

カリムが話しかけてきたことで我に帰った俺はカリムの問いに答える。

「それでこの世界にやって来たショッカーは一真さんが撤退させた… ということですね」

「いや… 俺だけじゃない。ギンガとリナ… そしてダブルライダー、皆が一つになって倒せたんだ。一人じゃ無理だった」

おそらく地獄大使は元の世界に戻ったはずだ、だが今頃はダブルライダーに倒されているだろう。

するとカリムは考えるような表情をし、俺に言った。

「おそらく以前に私が預言者の著書で予言した」プロフェーティン・シュリフテン 異なりの空から黒き意思現る” というのはその組織のことでしょう。そして予言通りに貴方が打ち倒したということです」

「そうなのか… あの時はそんなこと考えてる余裕なんか無かったぜ」
元々予言のことをあまり気にしてなかったうえあの状況だ。余計な事考えるのは無理だ。

「とりあえず現状は大丈夫みたいやな。けど念の為にもう一度調査を試してみよか。今度は私も現場に行って確認したいしな…それじゃカリム」

そう言うとはやてはカリムと目配せする。一体何だ？と思った矢先であつた。

「一真、退院おめでとうな」「一真さん、無事退院おめでとうございます」

「ウエ!？」

不意を浸かれた一言で驚くあまり変な言葉が…いや、このまま何もないものだと思つていたからな。完全に不意打ちだった。

「こう改まつて言われるとな…けど、ありがとう」

これでこの事件のことは一段落着いた。

その後俺は先に部屋を退室した。というのも二人はまた別のことで色々と話したいこともあつたようで、「あんたと話してみたいって人があるから会つてきたらどうや?」とはやてに言われたからである。決して邪魔者扱いなんかじゃ無いんだからな!つか前にもこんなことがあつたような…。

「その少年」

特に目的も無く適当に通路を歩いてると誰かにに声を掛けられた。この声は女性かな?なんて思いつつ俺は振り返った。

「はい、何ですか」

そこまで言ったところで動きが止まる。

なぜならそこに居たのはヴォルケインリッターの一人、剣の騎士ことシグナムであつたからだ。

「人違いだつたらすまないが、君は小野寺一真か？」

「は、はい。俺が小野寺一真です！」

あのシグナムに話かけられたせいで俺の声は見事に裏返つてしまつた。そんな俺を見てシグナムは不思議そうな顔をしたがそのまま話を続ける。

「いきなり声を掛けてしまつてすまなかつた…君の話は主から聞いている。それで一度話してみたいと思つていたのでな」

「そうだつたんですか。ところで一体はやて　さんはどんな事を言つていたのでしょうか？」

つい呼び捨てにして訂正する。はやては俺よりも立場がかなり上だから本当は呼び捨てなんてダメなんだろう、それにはやてを主とするヴォルケインリッターの前でなんて死亡フラグが…！
内心ビビる俺を見てシグナムは

「主が呼び方については何でも良い、と言つていたので気にするな」と言つた。あー良かった。

「それで主が言つていたことだが…君が他の世界から来たこと、そ

して”仮面ライダー”たるモノになることぐらいだ」

やっぱり話してたか…ま、特に隠すこだわりとか無いから問題ないが。

「そうですか…ところでシグナムさんはここで何をしているんですか？」

「ああ、主の警護だ…と言っても今は警護の必要はないので暇を持て余していたところだな」

シグナムは苦笑して答えた。ということは今なら稽古でもつけてもらえるか？

（今ぐらいしか頼めるチャンスは無さそうだしな…！）

「シグナムさん、お願いがあります」

「む、何だ？」

そう言うときグナムは真面目な顔になってこちらを見た。それを見てやっぱり真面目だなあ、など思ってしまった。

俺は誠意を込めて言った。

「俺と…戦ってください！強くなりたいんです！」

そう無茶だと思われることを言うときグナムは考えるような表情をし、

「いいだろう、だがその理由を聞きたい。くだらん理由なら…二度

と剣を交えることは無い」

と、言った。そう言われて俺の脳裏に一週間前のあの出来事が思い出された。

あのとき俺はダブルライダーが来なければ負けていた。そして二人も助けられなかった。あれはある意味”偶然”だったのだ。

そんなのは嫌だ。偶然で勝てただけじゃ…誰かを助けられない、守れない。助けたいのに助けられない。

だから強くなりたい。あんな奴らに負けまいぐらいに強くなりたい…！

「助けたい人を助けられるようにです。思いだけじゃなくて、せめて助けられる力だけでも欲しいんです！」

俺は言った。それは嘘偽りの無い本心の一言だ。

シグナムは一旦目を瞑った後こう言った。

「ふむ…助けるための力か。その気持ちと力は一步でも意味を履き違えると逆に助けるどころか苦しめることになる…その意味を間違えないようにしろ」

そう言うとシグナムは歩き出した。

（やっぱりダメか…）

そう思っているとシグナムは振り返り言った。

「何をしている？戦ってくれと頼んだのは自分であろう」

そう言われて俺に嬉しさがこみ上げてきた。あのシグナムが俺と戦

つてくれるというのだ！こんな出来事、嬉しくないわけがない。
俺は前に行くシグナムの後をすぐさま追った。

第12話 ひとときの平穩（後書き）

誤字脱字等は気付きしだい訂正していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177s/>

仮面ライダー×リリカルなのは 転生者の名は仮面ライダー

2011年11月17日20時15分発行